

第6号
2016

もの Narrative Tourism がたり 観光

行動学会誌



創刊にあたって

本学会論文誌創刊の意図は「観光」を論じた読み物をつくることである。

「観光」は地域や学問領域を越えたのしみであり、学ぶよろこびである。共通のたのしみやよろこびを「読み物」として会員に伝えるために印刷物として配布することは学会に求められている任務だと考えた。

学会員共通の関心をかき立て、共通の課題に応える「読み物」をつくりたい。そして「読み物」であるから研究者以外の一般の人々にも知ってもらい、読んでもらいたい。学会にふさわしい学問的な内容を備え、学術論文の体裁をもった堅めの読み物も、事例報告やエッセーなど柔らかめの読み物も収めたい。書きたい人の熱い思いを受けとめる場も必要だ。こうしてこのような学会誌が誕生した。投稿する人も手にとって読む人も共通の関心は「読み物」である。すなわち書

き手には、人に読ませようとする配慮、読んでほしいという情熱、が求められる。一方、読み手には読み物として妥当かどうか、わかってもらおうとの努力、気配りがあるかどうか、の吟味をお願いしたい。書き手と読み手の双方が求めるもの間に本誌の輝きは生まれるだろう。

『ものがたり観光行動学会』には、呼びかけに応じて、物語が好き、歴史が好き、人が好き、遊びが好き、そんな人々が集まってきた。そしてメンバーが納得できる舞台づくり、環境づくりに取り組んできた。

若い世代には、何か文章を書いて投稿できる媒体が欲しいという声が強い。ここに誕生したのは、まとまった考えを發表したい、聞いて欲しい、読んでほしい、意見をたたかわせたいという思いを持つ人に提供される新たな場所である。

ものがたり観光行動学会 会長 白幡洋三郎

●基調セッション

プロローグ

G・W・バークレー

キリスト教における九州の意義と西南学院の創立

パネルセッション

登壇者 **デ・ルカ・レンゾ**／**安高啓明**／**加藤晃規**／コーディネーター **高田公理**

キリスト教の伝来、伝承の地としての九州のものがたり

―「長崎の教会群とキリスト教関連遺産」の世界遺産登録と地域づくり―

研究発表論文

加藤晃規

補遺 ユネスコ世界文化遺産への道…

「長崎の教会群とキリスト教関連遺産」改め「長崎と天草地方の潜伏キリシタン関連遺産」へ

●特別セッション

プロローグ

大黒伊勢夫

古代からの九州のものがたりと観光地域づくり

パネルセッション

登壇者 **葦津敬之**／**西高辻信良**／**中村靖富満**／**小林正勝**／コーディネーター **豊田徹士**

古代・中世の大陸との交流における九州の役割とそのものがたり

―「宗像・沖ノ島と関連遺産群」の世界遺産登録と地域づくり―

年次大会のものがたり

●研究発表論文

玉ノ井浩司

協働のまちづくり “ぶんごおおの未来カフェ” ―「次の世代につなぐ」まちづくり―

山中鹿次

ポスト熊本地震とマラソン大会と観光振興 ―豊肥本線沿線を中心として―

今西 衛／**舛田佳弘**

鉄道沿線の日常から見えてくる地域の魅力 ―学生の視点で見るぶんご大野里の旅―

李 有師

里の旅リゾート「ロジきよかわ」で過ごした1年間

高田公理

旅先で土地ごとの嗜好品を楽しむ

旅の原稿を求めています・編集規程および執筆要領について

概要

●エッセイ

世界遺産の登録と観光地域づくりに向けて

ものがたり観光行動学会 九州広域観光シンポジウム
第5回年次大会記念シンポジウム

九州のものがたり

海外との交流の道

基調セッション

P.04

キリスト教の伝来、
伝承の地としての九州のものがたり

—「長崎の教会群とキリスト教関連遺産」の
世界遺産登録と地域づくり—

特別セッション

P.32

古代・中世の大陸との交流における
九州の役割とそのものがたり

—「宗像・沖ノ島と関連遺産群」の
世界遺産登録と地域づくり—

2015
10.11 SUN

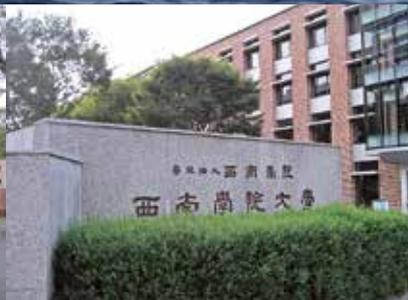
[福岡]西南学院大学
西南コミュニティーセンター



西南学院大学博物館（日本館）



西南コミュニティーセンター



西南学院大学



モリスト教における 九州の意義と 西南学院の創立

G.W.Barkley

G.W. バークレー

西南学院大学院長

1

挨拶・自己紹介

皆さんこんにちは。ただいまご紹介に預かりましたバークレーと申します。

まずは、会場校として挨拶をさせていただきます。ご存知の方も多いと思いますが、西南学院は来年で100周年を迎えます。この100年の間、福岡、九州を中心に卒業生を輩出してまいりましたが、これからも一層地元の福岡、九州に貢献できる大学を目指しております。今日は、このように多くの皆さまにお集まりいただき、学会が開催できることを光栄に思います。

ありがとうございます。このコミュニティセンターは、学外の方でも誰でもお使いいただける施設ですので、機会がありましたら皆さんの会社の集まりなどに利用していただければと思います。

ここで短く自己紹介をさせていただきます。私は再来週には日本での生活が32年目に入りますので、自分の人生の半分以上を日本で過ごしていることとなります。毎朝納豆を食べ、毎晩寝る前には必ず芋焼酎を飲むというように、日本では珍しい外国人ですが、アメリカに帰りますとさらに愛なアメリカ人です。居場所のない人間になってしまっています。仕事についても同じです。現在は理事長と院長を兼務させていただいてますが、院長は企業の会長と同じで現場を持っていません。理事会では多少影響力はありますが、西南学院の場合は各学校は自立して経営を行っているため、ほんとうに働いているのは園長と校長と学長ということになります。

私の専門はローマ帝国時代の紀元1世紀から3世紀までのキリスト教の歴史です。新約聖書もまだない、教会堂もないような非常に面白い時代です。しかし、今日の講演の準備をしながら、もっと九州のキリスト教について学んでおけばよかったですと思いました。

2

キリスト教における九州の意義

さて、本題に入りますが、私の講演のタイトルにつきましては、「キリスト教における九州の意義」とするべきか、「九州におけるキリスト教の意義」とするべきか少し迷いました。私は大学では必須科目のキリスト教を担当させて

いただけてますが、必ず試験に出すのは、「キリスト教が最初に着いたのはどこの国か？ 米国か日本か？」という問題です。実はこの答えは日本です。日本のほうがアメリカよりも早いのです。1549年にザビエルは鹿児島に上陸し、キリスト教が日本に入ってきました。それからわずか50年足らずの1600年までには、だいたい50万人の日本人の方向がキリスト教を信仰するようになっていました。このことはたいへん珍しく、またすごいことだと思います。現代の布教は必ずしもうまくはいっていません。なぜ変わったのかということいろいろ調べたところ、改めて九州は恵まれたところだと思いました。

私は院長として東京や大阪、北海道などの各地で挨拶をさせていただくときには、日本の将来は九

州や北海道からしか望めないと思われ返り返し申し上げます。大阪や東京の方には失礼になります。大阪や東京からでは日本の将来は成り立たないと思っております。

日本中のどこも、生活は非常に保守的で考え方も固く、また、どこもあまり変わりのない社会になつていっていると思います。しかし、九州はそうではありません。なぜかというところ、これは私個人の意見に過ぎないのですが、九州の素晴らしいところは、ほとんど韓国と中国、琉球国との歴史との関わりの中で過ごしてきました。本州はそうではありません。北海道は現在のロシアや韓国との交流があったでしょう。九州の歴史は本州とともにというよりも、アジアともにあつたのだと思います。30年ほど前に私が東京から福岡に引越してきたときに強く感じましたことは、九州人はたいへん心が優しく、新しい考え、新しいアイデア、新しい刺激をまず受け止めて考えてくれるということでした。これは九州の人の優れたところだと思います。今から500年、600年前にも全く同じように、九州の人たちはザビエルやほかの宣教師たちが語ったことを受け止め、考え、次第にキリスト教を信じるようになっていきました。

一方、ザビエルの優れた布教戦略の一つは、まずは大名を説得して理解を得て、そのあとで家来や一般の人たちに布教するというやり方でした。

その後禁教になり、隠れキリシタンの時代になるわけですが、それでもなお宣教師たちの活動は続けられました。その活動の一つに社会奉仕があります。カトリックの神父さんや司祭さんたちの間には「慈悲の組」という団体の奉仕活動があり、災害や震災の現場での医療活動や支援活動、ハンセン病の患者さんの介護支援、貧しい人たちへの食事の配給などの活動を行っていました。親を亡くした子どもたちや未亡人たちを支える活動にも取り組んでいました。禁教の時代にあつて、これらの活動はキリスト教を表に出さずに行われていました。さらにもう一つの活動として挙げられるのが児童教育です。カトリックの宣教師たちは、今の小学生の年齢の子どもたちに文字の読み書きをはじめ、親の階級にかかわらずいろいろな優れた教育を行いました。これも禁教の時代を通して続けられました。キリスト教の禁止が解かれた1873年以降は、カトリックだけではなくプロテスタントの宣教師も日本での宣教活動を再開す

るとともに、改めて教育にも力を入れるようになりました。

私が調べてみて驚いたことがあります。九州、沖縄にはカトリック系の小・中・高校が27校、大学が3校、短大が2校あり、これはすごいことです。

西南学院はプロテスタントですが、プロテスタントの学校法人は少なく、山口県から沖縄県の間には12法人です。九州がキリスト教との関わりが強いのはその立地にあります。ザビエルが中国から九州に到着したということでも分かります。

3 西南学院の歴史と教育理念

つぎに、西南学院の歴史をご紹介します。先ほど申しあげましたように、来年は創立100周年を迎えます。1916年に高等部、中学校が始まりました。それ以前に創立者のC・K・ドジャーは、福岡に学校をつくる必要があるということを読得するために、アメリカのミッションボードや日本の宣教師側に5年以上にわたって手紙を書きました。最初のうちは、資金も時間も人材もないというところで全面否定され、ドジャー先生は悩みました。このころ福岡

の男子校は修猷館1校だけでしたので、さらにもう1校男子校が必要だということを訴え続け、1916年に西南学院が創設されることになりました。宣教団側は、当時の九州の中心であった熊本につくるべきだと主張したそうですが、福岡に創設されてよかったです。創設当時は104名の生徒と9名の教師でしたが、現在は舞鶴幼稚園、西南小・中・高と大学を合わせて1万1千人、教師・職員が600人の規模になりました。

福岡の地にあつて、西南学院という名前は不思議に思われるかもしれせん。まず他の宣教団によって東北学院がつけられ、さらに関西に関西学院が創立されました。東北と関西のつぎは日本全体の西南地域につくるということで西南学院と名づけられました。

教育理念はもちろんキリスト教主義です。ドジャー先生の教えを紹介します。ドジャー先生は、1926年(大正15年)5月27日発行の「西南9号」につきのよう書いておられます。このころ学生数は1000人ほどに増えていました。「子どもの学校はまだ子どもにすぎません。経験はありませんが、希望に満ちています。未来について言えば、日本にお

る最善の学校をつくるのが私どもの目的であると言っているだけです。私どもが最善ということとは、最大とか名声を上げるといった意味ではなく、質において第一となることでもあります。最善の学校は、高く開かれた理想で学生を感化し、かつ同胞に対する奉仕の生活に彼らを導き入れるということでもあります。西南学院は将来、社会に奉仕する学生を輩出しようとしています。」

現在西南学院では、「奉仕の精神」に関していろんな活動を実施しています。過去10数年間にわたって毎年フィリピンのマニラに学生4、5名を派遣し、ボランティア活動を行っています。3・11の東日本大震災後は、毎年100人の学生を支援活動に参加させることができるように財政的な準備をしています。また、他の学生につきましても、約8000人の大學生のうち4分の1ぐらいは福岡市や福岡県内、あるいは全国のボランティア活動に参加しています。最後になりましたが、皆さまのところにも卒業生がお世話になるかもしれません。観光の分野で活躍しているものも多くいます。よろしく願っています。

ご清聴有難うございました。

モリスト教の伝来、 伝承の地としての 九州のものがたり

— 「長崎の教会群と

モリスト教関連遺産」の

世界遺産登録と地域づくり —



0 はじめに

高田（コーディネーター）

高田でございます。私は歴史にもキリスト教にもほとんど造詣がありませんが、今日はものがたり観光行動学会のシンポジウムということで、司会をやらせていただきます。

ただいまバークレー院長から、キリスト教の伝来から今日に至るまでの歴史や、99年前に西南学院がこの地で設立され今日に至るプロセスのお話などを伺いました。

今から450年ぐらい前にフランシスコ・ザビエルが日本にキリスト教を伝えましたが、わずか50年の間に50万人の信者が生まれたということを今日初めて伺いました。フランシスコ・ザビエル自身も日本に来て、その当時の日本人の7割にも及ぶ識字率の高さにびっくりしたことや、好奇心の強い国民だということを書き残しています。海綿が水を吸い込むようにして、キリスト教の教えを受け入れていったのだと思います。その時代から約350年経って西南学院が創立されるわけです。

日本におけるキリスト教の伝来の歴史はアメリカよりも早いとい

登壇者

デ・ルカ・レンゾ

日本二十六聖人記念館館長

安高啓明

熊本大学准教授

加藤晃規

学会副会長・関西学院大学名誉教授

コーディネーター

高田公理

学会副会長・武庫川女子大学名誉教授

うお話もありましたが、17世紀の1614年には徳川幕府によって禁教にされました。それにも関わらず、隠れキリシタンという形でその信仰は脈々と伝えられてきました。このような歴史の上に長崎の教会群やキリスト教の歴史遺産が産み出され、今日まで伝えられてきたのだらうと思います。

現在、これらを世界文化遺産に登録しようという動きがあるわけですが、キリスト教の伝来、迫害、さらに潜伏していたキリスト教徒の再発見といった日本におけるキリスト教のものがたりについて、まずはデ・ルカ館長からお話を伺いたいと思います。よろしくお願ひします。

1 キリスト教の伝来とその浸透・拡大

デ・ルカ

よろしくお願ひします。

先ほどの話にもありましたように、ザビエルが日本に来てから本格的な禁教が始まるころまでは、現在のキリスト教徒の数と変わらないぐらいのキリシタンがいました。この頃の人口は現在の10分の1ぐらいですから、人口に対する割合からしますと、爆発的にキリシタンが増

えていったと言っても過言ではありません。この時代の日本におけるキリスト教の動きがどのようなものであったか、これからご紹介いたします。

ザビエルの時代以降、1580年代を中心に活躍した教皇グレゴリオ13世は、宣教師たちを日本に派遣する際には、先ずは教育施設をつくりなさいと言いました。グレゴリアン大学に倣ったようなまさに現在のミッシヨンスクールの原形がこの時代に生まれます。また、先ほどの紹介にありましたように、ザビエルやその他の宣教師たちは、日本には読み書きができる人が多く、宣教に適した国民だと感心したようです。グレゴリオ13世が亡くなった後に彼の業績をたたえた版画が製作されていますが、この版画には日本からの使節団を受け入れたときの様子などが描かれています。このような版画が残されたのは、カトリック教会の組織が、日本に対する高い関心を持っていたということを表していますし、ヨーロッパの人たちの関心もたいへん高かったということを示しています。

その後日本では、キリスト教に関わる日本人の修道士がたいへんな勢いで増えていき、教会を仕切るのには宣教師ではなく、修道士が担うようになっていきます。私たちはザビエルのような名のある宣教師たちに眼が行きがちですが、実際に教会を引っ張っていたのは宣教師の下にいた日本人のクリスチャンであつたと言つていいと思います。この頃のミサの様子が描かれた屏風絵を見ますと、400年前の日本式でありながら、ローマ教会と変わらないほど見事にキリスト教に適応していたことが分かります。

また、当時の神学教育は日本語で行われていましたが、360年以上も前に、現地の言葉でキリスト教が布教されていたということは、たいへん異例なことです。一方、日本人修道士も外国語を書いたり翻訳したりしていました。「ダミアン書簡」というものがあります。これは宣教師が書いたのではなく、ダミアンというクリスチャンネームの日本人修道士が書いたものです。修道士みんながそうではありませんが、何人かはこのような高いレベルにありました。

Gesantschappen der Kaiseren van Japan Arnoldus Montanus, Amsterdam, 1669



雲仙地獄版画

天正少年使節は、ヨーロッパに日本の文化の高さを見せびらかすというパフォーマンズのなところがありました。少年使節は、当時のヨーロッパ人から見て文化人だと思われるような服装をし、ヨーロッパのマナーで振る舞うことによって、日本での宣教師たちの教育が大成功だったということを知らせました。イモラというイタリヤのまちには少年使節からイモラ市に宛てた感謝状が残されていて、市は現在も大切に保管しています。また、使節の一人であった伊東マンシヨは、当時の教皇にきれいなスペイン語の書体で感謝状を書いていました。宣教師たちでさえ教皇に対して手紙を出すことができない時代に、感謝状を贈ることができたのは、少年使節が外交官の役割を果たしていたということであり、ヨーロッパとの文化交流の上で大きな影響を与えたと言えます。ポーランドのクラコフ市の博物館には、少年使節がポーランドの枢機卿から頼まれて書いた書が保存されています。

2 キリシタン迫害の時代

その後、信長の時代から秀吉の時代へと移ると迫害は厳しさを増し、使節たちも迫害の時代を迎えることとなります。日本人の信者の代表たちはローマのイエズス会の総長に対して、ミセリコルディアの設立許可願いを出しました。これは先ほど院長先生がお話になりましたように、信者たちが教会を動かしていたということの一つの表れです。オランダで描かれた迫害の絵がありますが、この絵には「雲仙地獄」と書かれています。描かれている内容は想像の産物ではありますが、ヨーロッパの人たちが、日本で地獄のような迫害が行われていることに大きな関心を持っていたことが分かります。天正少年使節の一人である中浦ジュリアンが、迫害についてポルトガル語で書いてローマに送った書が二十六聖人記念館にあります。1620年代にどのようなルートで口之津からローマに届けられたかは不明ですが、ローマに渡って30年から40年経っても語学力を保っていたことがこの書で分かります。

中浦ジュリアンの殉教
『イエズス会の殉教者』
マチアス・タンネル著
プラハ、一六七五年



中浦ジュリアン書簡

口之津より、ヌノ・マスカレニヤス神父宛、1621年9月21日



また、ほかにも何百人もの信者たちがサインをして、ローマの信仰を守りますのでお祈り下さいという文書をローマに送っており、信者たちの組織力がいかに強かったかが分かります。さらに、バチカンの図書館には、日本語とラテン語で書かれた立派な文書がありますが、これは教皇宛に送られたもので、2008年になって188人の殉教者に認定された信者のうちの3分の2の方たちのサインがこの文書の下の方にあります。中には、かつて島原の少年使節を受け入れてもらったことを感謝しますということが書かれていますので、少年使節の派遣以来、ローマとの関係が保たれていたことが分かります。なお、中浦ジュリアンがどのような方法で殉教させられたかは、プラハで出版された本には絵入りで詳細に描かれています。

徳川時代になると、全国にキリシタン禁令を知らせる高札が立てられるようになります。高札には伴天連すなわち信仰者1人に対して銀50枚という莫大な報奨金を出すといったことが書かれました。また、最初のころの高札にはありませんが、「立ちかえり者」という言葉が出てくるようになります。

す。これは、キリスト教を一旦公に捨てたけれども、もう一度戻ってきてキリシタンを名乗る人のことを指し、このような人たちのことを申し出れば銀300枚の褒美が出されることになっていました。つまり、役人からすれば、「立ちかえり者」は手ごわい相手であり、立ちかえる者が沢山いたからこそ、高札で知らせていたということになります。

つぎに踏絵ですが、カトリックにとっては聖なる絵を踏むことが体が精神的な迫害であったということですから、外国から持ち込まれた聖なるもの（ブロンズ像など）についてもキリシタンたちは役人に没収されないように隠し通しましたが、そこには相当な組織力や努力がありました。

最後に弥勒菩薩についてお話します。キリスト教が伝えられるはるか前の6世紀から7世紀に朝鮮からもたらされた弥勒菩薩があまりにも、もちろん、この仏像はキリスト教には関係ないのですが、キリシタンたちはこの仏像をキリスト像だと思って信仰していました。その痩せた姿をキリストの40日間の断食に結びつけ、つまり、読み直しをしていたということです。

キリシタン禁制高札、正徳元年(1711)



定
切支丹宗門は累年御制禁たり自然
不審成もの有之は申出へし御ほう
びとして
はてれんの訴人 銀五百枚
いるまんの訴人 銀三百枚
立かへり者の訴人 同断
同宿并宗門の訴人 銀百枚
右之通可被下之たとひ同宿并宗門
之内たりといふとも訴人に出る品
により銀五百枚可被下之隠置他所
よりあらはるゝにおめては其所之
名主并五人組迄一類ともに可被処
厳科者也仍下知如件
天和二年五月日

川原慶賀作「踏絵」



ピエタ
(イタリア製ブロンズ)



一六一一七世紀作製
一九六二年長崎で発掘された
一九七〇年長崎県文化財指定

心の中に本当の信仰があったから
こそこのようにして信仰が続けら
れたということです。信仰が深く
なければできません。状況に適応
しながら信仰を守り通していまし
た。大分では壺の中にキリスト教
関係の大切なものがたくさん隠さ
れていたということもありました
が、九州ではこのような信仰の形
をとりながらキリスト教信仰が伝
えられ、のちのちの信徒発見へと
つながっていくこととなります。

高田

どうも有難うございました。先
ほどパークレー院長が、九州は諸
外国に対して開かれた気持ちを持
った場所だと言っておられました
た。開かれているということは、
中国や韓国などの国際的な付き
合いがこの地を媒介に行われて
いたことと関係があるのだろう
と思います。

キリスト教が入っては来ます
が、禁教になり、さまざまな形で
密告を奨励したり、それに報奨金
を出したり、踏絵をさせたりと
いった迫害が行われました。しか
し、キリストが亡くなったときの
ピエタの像がちゃんと残っていた
り、朝鮮半島でつくられた弥勒菩
薩をキリストに読み直したりとい
うことがあったということです



国内最古の一つと思われる。6-7世紀の朝鮮製とされ、美術的な価値と同時に隠れキリシタンが祈りに用いた経歴があり、日本の歴史を物語っている宝物である。昭和57年に県文化財に指定された。

が、弥勒菩薩はマリアとみなすというのではなかったかと思ってしまうかもしれませんがどうか。

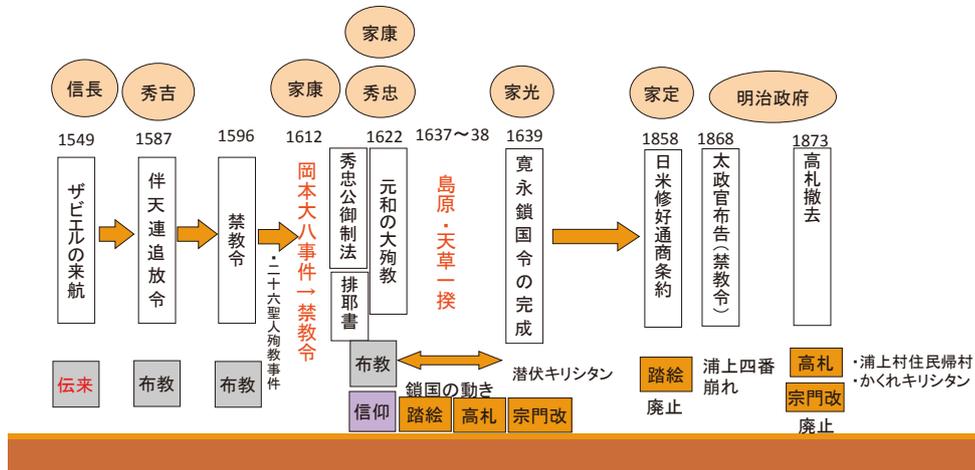
デ・ルカ

白い磁器のマリア観音がよく知られていますが、これは観音様をマリア様に見立てたものです。先ほど紹介したのは、弥勒菩薩をキリストに見立てたものです。しかし、見立てるといふ発想は同じです。

高田

このような話を聞きますと、キリスト教禁圧の時代への興味が深まる訳ですが、安高先生は江戸期の歴史がご専門だと伺っています。潜伏キリシタンの遺物を西南学院大学の博物館にはたくさん持っておられて、その博物館にも関係しておられたとのことですので、江戸期の禁教の状況を教えて頂ければと思います。

日本キリスト教史の概略



3 江戸幕府の禁教政策 及び長崎の教会群と キリスト教

安高

熊本大学の安高と申します。

私の方からは江戸幕府の禁教政策を中心に話しさせて頂きますとともに、長崎の教会群世界遺産関係のこともありますので、こちらも合わせてお聞きいただければと思います。

日本キリスト教史の前半部分はデ・ルカ館長がお話になりましたので割愛しますが、禁教の最初期としましては豊臣秀吉の時代の1587年の伴天連追放令があります。しかし、その前にも京都で禁教令が出されているのですが、今回は伴天連追放令を取り上げたいと思います。この伴天連追放令は、博多の箱崎で出された禁教令で、注意しておかなければならないのは、この法律はあくまでも布教を禁じたものであって、信仰そのものを禁じたものではないということ。つまり、宣教師の人たちは国外退去命じられる訳ですが、一方、この頃のキリスト教信者は貿易と布教とを表裏一体で行っていましたので、この法律がどれくらい効力があつたかは

研究者によって意見が分かれるところ。これ以降、たびたび禁教令が出されるのですが、江戸時代に入ると特に、岡本大八事件というキリスト教者の幕府家臣が賄賂を貰った

り、奉行を殺害しようとしたことが明らかになる事件があり、これを受けて江戸幕府もさらに禁教令を強いものにしていくようになります。このようにして政権側による禁教政策の素地がつけられていく訳です。

日本キリスト教史の中でも画期となつたのは、1637年から1638年にかけて起こつた島原・天草一揆です。我々の世代は島原の乱という名前前で教科書に出てきましたが、現在研究者の間では乱ではなく、一揆と表現しています。一揆と乱とはどう違うのかという話になるのですが、乱は基本的に、国家に逆らつて、それに対抗して自分たちが政権を取るということであり、一揆は、自分たちが政権を取ることまでは考えておらず、「反発」の意味合いが強いものです。島原・天草の一揆の形態は、中世以来の継続性が認められ、キリスト教を振りどころとしながら、諸問題に立ち向かつたといえます。従つて、島原の乱で

はなくてあくまで一揆だろうということが一般的な見方です。

島原・天草一揆が終わりまして、翌年には寛永鎖国令が完成します。鎖国体制下で、踏絵がつくられたり、絵踏みが行われたり、高札がかかげられたり、宗門改めがあったり、余りにも厳しい政策だったので、キリシタンたちは地下に潜らなければならなくなりました。こうして潜伏キリシタンが誕生します。潜伏形態のはてに、マリア観音がお祈りの対象にされていきました。1639年には布教と信仰の双方が禁止されます。これ以降、禁教の時代が続く訳ですが、そこに風穴を開けたのが1858年の日米修好通商条約です。この条約に絵踏みを禁止するという条項が入っていません。教科書では日米修好通商条約は、領事裁判権とか関税自主権がないということが書かれていますが、この条約の他の部分を見ますと、絵踏みの廃止を求めている要望が受け入れられ、条文化されます。これを日本も批准していますので、当然、日本は絵踏みを止めなければいけなかった訳です。さらに、日蘭修好通商条約では、居留地の中に礼拝堂をつくることを認めさせています。このように、キリスト教解禁への動きがこ

の頃から起こってきます。明治政府になっても、太政官布告によって改めて禁教令が出されます。その結果、長崎の浦上村に住んでいた多くのキリスト教徒たちが各地に追いやられる「浦上四番崩れ」という事件が起きます。その後1873年に高札が撤廃され、浦上村の住民たちは帰村することになります。浦上四番崩れは、江戸から明治へと時代をまたいだ、日本の宗教政策を反映しています。

一方で、依然として潜伏キリシタンのままで教義を守ろうとしていた人たちが隠れキリシタンになりました。なお、歴史学の立場からしますと、潜伏キリシタンと隠れキリシタンとは分けておかなければいけないと考えています。

以上のようなキリスト教史の概略を踏まえまして、キリスト教史の光と影についてお話しいたします。影の中でも代表的なのが絵踏みです。これは長崎での絵踏みを描いたものです。正面に描かれているのが絵踏みをしている人で、その前に役人が座ってしっかりと足をのせたかどうかを確認しています。その横に座っている人の中には帳面が広げられ、手にはハンコが持たれていています。これは宗門改帳にハンコを押している

ところです。右側は島原藩の宗門改帳で、西南学院大学博物館所蔵の資料です。これには、旦那寺に所属していることを証明するサインがあります。また、画面の左側に長崎式の鏡餅が描かれています。長崎では、正月に絵踏みを行うほど絵踏みが重要視された行事だったことがわかります。

「長崎の教会群とキリスト教関連遺産」(長崎県世界遺産登録推進課作成)を調べましたところ、3つの章(時期)に分けて世界遺産候補が構成されています(構成資



長崎の教会群とキリスト教関連遺産



- 概要
- I キリスト教の伝播と布教
キリスト教の繁栄と弾圧を示す遺跡
 - II 禁教下の継承
禁教時代に形成された集落の内外にある、禁教時代から続く信仰の場、崇敬地等
 - III 解禁後の復帰
潜伏して信仰を守ってきた場所に信仰の証として建てられた教会群

南島原市のキリスト教関連遺産



- 構成資産・・・日野江城跡・原城跡
- ⇒概要 I に相当
 - 原城跡の位置付け
 - ・・・「弾圧を示す遺跡」???
 - (≒伝播・布教)
 - ①島原・天草一揆のとらえかた
⇒歴史観の構築
キリスト教的位置付け
 - ②キリスト教史の位置付け
⇒「歴史の連結点」
 - ③構成資産での特異性
⇒史跡と現行遺産

産リスト)。第I章は「キリスト教の伝播と布教」、第II章は「禁教下の継承」、第III章は「解禁後の復帰」となっています。

ご覧頂いて分かりますように、遺産候補のほとんどが教会群ですが、このなかでも異質な遺産候補として島原半島右側の南島原市では日野江城跡と原城跡が挙げられています。島原市のキリスト教関連遺産は、第I章の「キリスト教の伝播と布教」に当たりますが、原城の遺跡は弾圧を示す遺跡として位置付けられています。原城が構成遺産のなかでどのように位置づけられているのかといえますと、島原・天草一揆という負の歴史の象徴的な場所として捉えられています。また、この一揆は禁教に至るきっかけをつくった「歴史の連結点」になる事件だったということ、第I章の構成資産に原城跡が組み込まれています。現在でも使われている教会群が多く取り上げられている中に史跡である原城が組み込まれていますが、これをどのように観光に結び付けていくのかということについては、歴史学をやっている立場としても注視しているところでございます。

世界遺産の考え方は、世界遺産条約第4条に基づくものになり

ます。第4条には、「次世代への伝承やそのために必要な保護・保存・整備を行うとともに、学術的な高さを維持する」といったことが書かれています。学術調査をしっかりと行った上で学術的・文科学的価値を見出す必要性が述べられています。正確な価値付けを発信し、もっと地域レベルや住民レベルでの伝承としてやっていかなければならないと考えますが、それを行政主導でどこまでやっていくのが課題となります。

日本の文化行政側の目線では、どうしても光の部分にスポットを当てがちで、負の部分が軽視され、むしろ蓋をされるという傾向にあります。このことにつきましては、襟を正さなければいけないところがあります。負の部分があつてこそ光の部分が輝くということ、特に禁教のことを研究している私としては強く訴えないといけないと考えている次第です。

高田

絵踏みの様子が描かれた絵を興味深く見せて頂きましたが、宗門改めはお寺がやっていたので、この時代はお寺が区役所や市役所の役目を果たしていたことが改めて良く分かりました。また、1630年代から1858年の

世界遺産条約

第四条

各締約国は、第1条及び第2条に規定する文化及び自然の遺産で自国の領域内に存在するものを認定し、保護し、保存し、整備活用し及びきたるべき世代へ伝承することを確保することが本来自国に課された義務であることを認識する。このため、締約国は、自国の有するすべての能力を用いて、また、適当な場合には、取得しうる限りの国際的な援助及び協力、特に、財政上、美術上、科学上及び技術上の援助及び協力を得て、最善を尽すものとする。

①次世代に伝承

②必要な保護、保存、整備活用

- ・行政主導のもとで組織的に行うこと
 - ・担当職員を配置し、行政的かつ財政的な枠組み
 - ・学術的価値の高さを維持しつつ、さらなる研究を奨励する
- ⇒登録時点での構成資産の歴史的位付けの確立・・・次世代への伝承に対する警鐘

間に、隠れキリシタンや潜伏キリシタンの人々たちを見つけて出すためのいろんな事業が行われていたことも分かりました。この時代に隠れキリシタンや潜伏キリシタンの方たちがどのような暮らしをしていたのか。聞くところによりますと、西南学院の博物館にはその頃のキリシタンの遺物のコレクションがあるというです。そのコレクションと当時のキリシタンの暮らしについて部分的にでもお話頂ければと思います。安高先生いかがでしょうか。

安高

先ほどお話に出ましたマリア観音を西南学院大学博物館は収蔵しています。これは元浦上村の潜伏信者が持っていたものを長崎のバプテスト教会が寄贈を受け、さらに教会から西南学院に寄贈されたものです。さきほどデ・ルカ館長が弥勒菩薩を紹介しておられました。これはオーストリアの信仰の形態です。一方、私は各地を調査していますが、長崎に限らず久留米あたりでは、教会の暦を隠し持つて信仰していました。クリスマスの祝いのおきなどに使っていたことが分かっています。三井郡太刀洗の今村教会にこの暦が残されています。

4

ヨーロッパから見た日本のキリスト教徒弾圧

高田

どうも有難うございました。ところで16世紀の半ばといいますが、日本はヨーロッパとはタイプは違っています。識字率が7割ぐらいあったというように、それなりに文明社会になっていきます。その頃からキリスト教は世界を対象にして布教を進めていく訳です。日本の場合はそれを徹底的に弾圧しますが、例えば島原・天草一揆に見られるように、制限や弾圧を受けながらもキリスト教を伝えて行きます。このことは、キリスト教にとっても世界の人たちにとっても、たいへん珍しい体験だったのでないかと私は勝手に想像しています。日本でのキリスト教弾圧やそれに対して秘かに信仰を繋いでいった歴史、さらにそのような人々を19世紀になって発見する。このようなことについて、ヨーロッパのキリスト教者としてデ・ルカ館長はどのようなイメージをお持ちになっているのかお伺いしたいと思います。

パリ外国宣教会と教会

黒字: 世界遺産登録候補構成資産

赤字: 神父の関わる教会建立

種別資産	竣工年	設計・計画者	文化財シロ	建築構造
1 (国)大浦天主堂	1864(安政18年)	フェレ、フアン・マリア神父	(国)国宝	レンガ造
2 (国)大森天主堂	1875	ドロ神父	(国)重要文化財	木造・レンガ装飾
3 (国)大森天主堂	1879	フレデリック神父、大浦伊勢守		木造
4 旧五輪教会堂	1881	不詳	(国)重要文化財	木造
5 出津教会堂	1882(明治15年)	ドロ神父	(国)重要文化財	レンガ造
6 旧出津教会堂	1883	ドロ神父	(国)重要文化財	木造・石造・レンガ造・木骨レンガ造
7 (国)高田天主堂	1885	ドロ神父	(国)重要文化財	木骨レンガ造
(国)大野教会堂	1890	マルマン神父		木造
(国)井持教会堂	1893	ドロ神父	(国)重要文化財	石造
(国)浦上天主堂	1895	ベリユ神父		レンガ造
(国)上野教会堂	1895~1915	フレノー、ラザ神父、狭川孝助		レンガ造
神ノ島教会堂	1896	マウ神父		—
宝島教会堂	1897	デュラン神父		レンガ造
聖泉天主堂	1898	マウ神父		木造・レンガ造
8 聖泉天主堂	1902(明治35年)	マルマン神父、狭川孝助	(国)重要文化財	レンガ造
9 聖泉天主堂	1908	ベリユ神父、狭川孝助	(国)重要文化財	レンガ造
10 聖泉天主堂	1908	狭川孝助	(国)重要文化財	レンガ造
11 聖泉天主堂	1909	マウ神父	(国)重要文化財	レンガ造
12 聖泉天主堂	1911	マウ神父、狭川孝助	(国)重要文化財	レンガ造
13 聖泉天主堂	1915	ドロ神父、狭川孝助	(国)重要文化財	レンガ造・木骨レンガ造
14 聖泉天主堂	1918(大正7年)	マウ神父、狭川孝助	(国)重要文化財	レンガ造
15 聖泉天主堂	1918	狭川孝助	(国)重要文化財	木造
16 聖泉天主堂	1919	狭川孝助	(国)重要文化財	石造
17 聖泉天主堂	1925	狭川孝助	(国)重要文化財	石造
18 聖泉天主堂	1885		(国)重要文化財	石造
19 聖泉天主堂	16世紀後半	有馬城	(国)重要文化財	石造
20 聖泉天主堂	1598-1604	大森の乱	(国)重要文化財	石造
21 聖泉天主堂	禁制1645-1853	追分地	(国)重要文化財	石造
22 聖泉天主堂	禁制1645-1853	緒戸津	(国)重要文化財	石造

デ・ルカ

確かに、世界的に見ても非常に珍しいことです。潜伏するということがどこにでもありません。例えば、ローマ帝国時代に（迫害から逃れるために）カタコンベに逃れるということがありましたが、カタコンベに隠れさえすれば大丈夫でした。また、日本では隠れた後にマリア観音を信仰するといったように、順応が行われませんでした。ヨーロッパではこのようなことはあり得ません。観音を置けばキリスト教ではなくなるという発想です。日本ではマリア観音を置いてキリスト教の意識を持ち続けましたが、このようなことは日本にしかない現象だと断言していいと思います。

高田 ヨーロッパの人たちは大変驚かされたことですが、評価はどうだったのでしょうか。

デ・ルカ

評価は高かったと思います。しかし、ヨーロッパで余りにも大きなニュースになったことで大騒ぎになり、逆にそれが日本でのさらなる迫害に繋がったことも事実です。

高田

ヨーロッパでの隠れキリシタンに対する評価は高いということですが、逆に、隠れキリシタンや潜伏キリシタンに対する徹底的な弾圧を加えた当時の日本の政治権力に対するヨーロッパの人たちの見方について興味を惹かれるのですが、その辺りについてはいかがでしょうか。

デ・ルカ

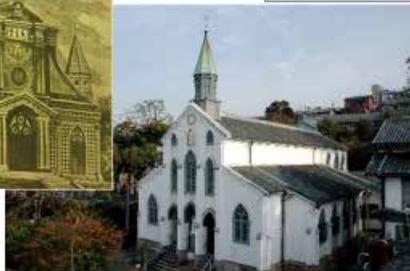
確かに天正少年使節の時代には日本は優れた国だと思われていたのに、禁教令を出して弾圧を続けていることは野蛮な国だということの評価につながったと思います。ですから、岩倉使節団に対しては、禁教や弾圧を止めない限りは交渉に応じないということになりました。

高田

19世紀になって、日本でキリスト教徒への弾圧がなくなってきた



1864年 旧大浦天主堂(フランス寺)



現在の大浦天主堂

創建当時
ゴシック様式、なまこ壁、三層式、リブヴォールト天井、
三層(トリフォリウムあり)内部立派



江戸末期 禁教下の3聖堂



1862年 横浜天主堂(ネオクラシカル様式)



1863年 函館ハリストス復活聖堂(ビザンチン様式)

のは、キリスト教者の問題ではなくて、近代的な人権思想の影響で日本の政府も信教の自由を保障するようになってきたということです。しかし、宗教が自由化された瞬間に、たくさんの方のキリスト教関係の建築物が壊れるようになっていく訳ですが、そのようにしてつくられた教会建築は古いものではないのですが、ギリシヤの歴史と集落の文化的景観として現在、世界遺産に登録しようという動きが出てきています。これらのキリスト教建築物の多くは、日本人で敬虔な信徒であった鉄川与助という方の手によるものだそうです。このような建築物について、世界文化遺産における建築物の評価と考え方といった視点から、関西学院大学名誉教授で建築が専門の加藤先生にお話しをして頂きます。

5 長崎の教会群に見る3つのもの

加藤

「長崎の教会群に見る3つのものがたり」というテーマで、この2ヶ月間にいろんな勉強をさせて頂きました。今日は主に建築の話をして頂きます。今回のシンポジウムに先立ちまして平戸に行つて参りました。1549年にザ

ビエルが平戸に来たときには、教会はどこにあったのだろうかという事で訪ねて行きましたが、もちろん建物はありませんが教会跡はありました。どんな教会だったかは分からないのですが、多分近代に至るまで布教的なことやミサ的なこと、あるいは宣教的なことは家の中、それも普通の民家の家屋の中でやられていたんだろうと思います。

長崎の教会群が世界遺産に選ばれることについて、日本的な共感を得られるのだろうかという疑問もあると思います。長崎県は信者率が高く(4・43%)、また、日本のクリスチャン約150万人のうち長崎のクリスチャンは45万という多さです。45万人というのは、ザビエルが来て50年で50万人になったという数字と似ています。ちなみに、平戸の信者率は15%だそうですが、これは凄いことだと思います。このように、長崎は信者の方が多いというだけではなく、長崎の教会群を世界遺産にして日本のキリスト教の代表的なエリアにすることは素晴らしいことだと思います。この表の中の黒字の部分が構成資産の候補になっているのですが、数え方は色々あるのですが、

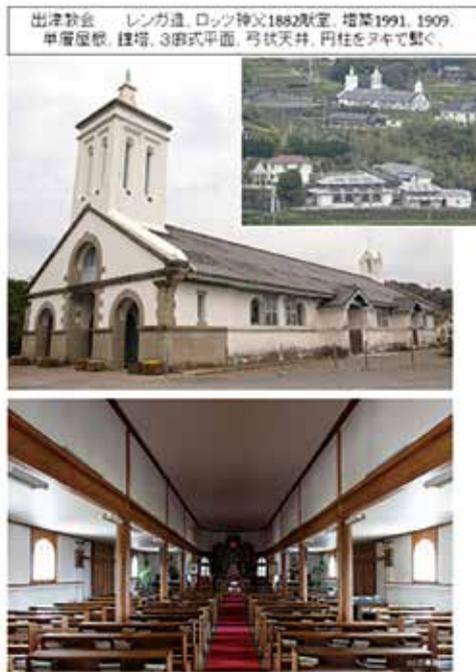
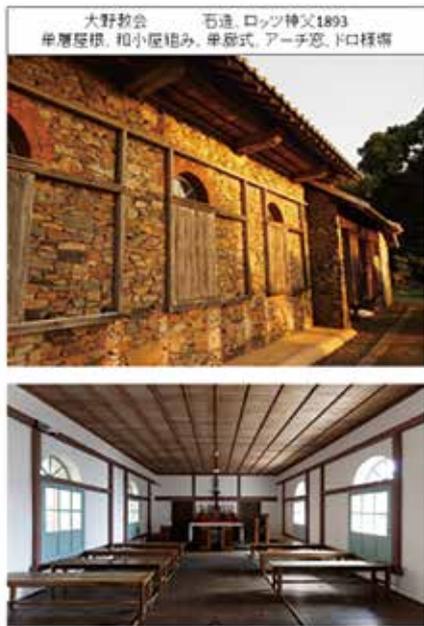
私は22資産だろうと思います。赤で示したものは、神父さんが関わったり、建築行為や建設行為を引っ張っていったと思しきもので、10数件あります。設計・計画者を見ますと、最初のころはドロ神父の名前が数多くありますが、後の方には鉄川与助の名前が出てきます。構成資産の中には国宝1件のほか、多くの重要文化財や文化財保護法で新しく定められました重要な文化的景観が入っています。この表で分かりますように、教会群は1920年までに大きく発達しました。1923年の関東大震災以降はレンガによる構築物は建てることができなくなり、その後は鉄筋コンクリート(RC)に変わっていきます。

このような経緯の中で、鉄川与助さんがいかに頑張っているんな技術を吸収していったかということをご紹介します。なお、九州の教会群をしっかりと調査された川上秀人さんという方がおられ、アーカイブ的にも大変な業績を残されています。

教会建築の流れを一言で紹介しますと、最初は木造、つぎにレンガ造がとって代わって、最後はRCになっていきます。様式的にはロマネスク様式とゴシック様式の

良く言えばハイブリッド建築、悪く言えばアジアの片隅に西洋の2流の作品ができたということになります。「アジアの片隅に西洋の2流の建物」という言い方は、明治時代のお雇い建築家たちが関わった建物に対してよく使われました。銀座のレンガ街もそうでした。結論的に申しますと、神父たちが頑張って教会建築の技術を伝えてくれて、それを受け継いだのが当時代表的な棟梁であった鉄川与助であり、彼が行き着いた完成形が今村教会と田平天主堂ということです。つぎに、代表的な教会建築をご紹介します。

日本で最初にキリスト教のシンボルとしてつくられた教会が3つあります。まずは横浜天主堂です。新古典主義様式で、正面にギリシャ風のポーチが付いています。バジリカ式と言って、教会の中は平面は細長い形で、一番奥に祭壇があります。この教会は今はありません。2番目は1863年に函館に建てられたロシア正教会の流れの教会(函館ハリスト復活聖堂)で、これはビザンチン様式と言っていいと思います。3番目は1864年に建てられた旧大浦天主堂です。いろんな様式が混じっていて、先の尖ったゴシック的な窓もあれば、正面中央部の



2段に重なった柱の部分はバロツク、屋根のトンがり帽子のような尖塔はイギリス様式です。重要なのは、これら3つの教会はすべて外国人のためにつくられたものです。禁教下でしたので、日本人のために教会をつくることはありませんでした。

その後、信徒たちが神父と一緒になつてつくり始めた教会の中で代表的なものが出津教会（長崎市）です。レンガ造の平屋で、塔の部分を除けば完全に日本家屋の形状をしています。内部空間はこれも完全な和風で、天井は平天井に近い形です。重要なことは、日本建築の木造は柱の上部を横になぐ貫（ぬき）が必要ですが、アーチをつくるには高い位置に貫を上げなければならず、これが日本の木造とヨーロッパの様式を混合することの限界です。大野教会はロツツ神父がつくられた石造の壁の教会です。

教会建築のある一定の完成形に近くなつてきたのが黒島天主堂（佐世保市）です。レンガ造のロマネスク様式で、マルマン神父が指導したと言われています。ロマネスク様式がゴシック様式と違うのは、単純に言いますとアーチに

半円形が用いられているというところ。内部空間を見ますと、アーチの上の高窓のところに横線が入っています。これをトリフォリウムと言います。この部分に立派な装飾が付けられています。これはゴシック様式の特徴です。黒島天主堂は明治以降に日本に入つてきた教会建築の未完成ではあります。ある一定の到達点だと言ふことができます。

その後、今村教会（福岡県三井郡大刀洗町）が建設されます。ロマネスク様式で双塔があり、建物の中央部を高くするために屋根を2つに分ける複層屋根になっています。屋根の部分は木造で、レンガ造との混構造です。

日本における教会建築の本当の意味での完成品は、田平天主堂です。三層式のタワーが立っていて、その最上部にドームが乗っています。内部空間を見ますと小さなアーチがたくさん並んでいます。先ほど説明しましたトリフォリウムが帯のように回っています。最後にご紹介するのは、小さな教会ですが唯一の石造教会の頭ヶ島教会堂（長崎県南松浦郡新上五島町）で、鉄川与助の単独作品です。内部を見ますとハンマー

ビームという横材（梁）が架けら

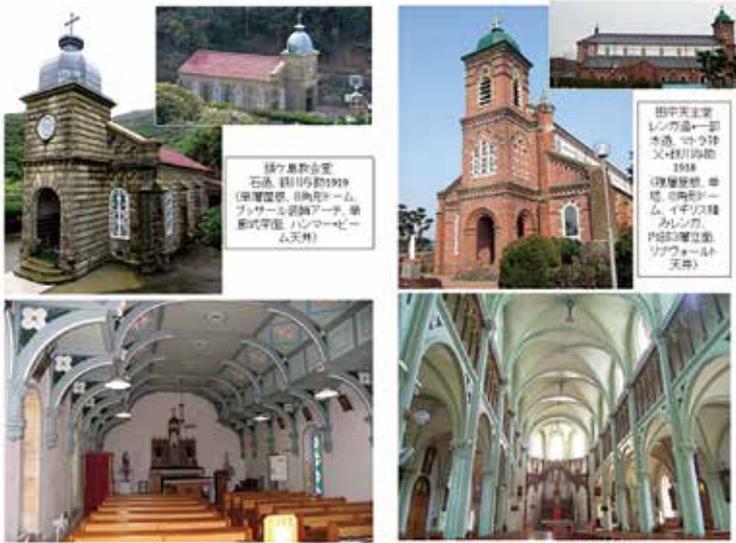


今村教会 福岡県・鉄川作 1913
(ロマネスク、双塔、重層屋根、
◎廊下平面、4部リア・ウォールト天井)



黒島天主堂
レンガ造+一部木造、マルマン神父・鉄川与助1902
(ロマネスク様式、◎廊下バシリカ形式、トリフォリウム付き)





緑ヶ原教会堂
石造、鉄骨、鉄骨コンクリート
(原簿記載、日向光造、
ブッセーと建築アーチ、
新式平屋、エンターピー
ム天井)

掛中天主堂
レンガ造一部
木造、木造
又+鉄骨
1938
(原簿記載、
日向光造、
ブッセーと
建築アーチ、
新式平屋、
エンターピー
ム天井)

れていまして、きわめて特殊な建築です。ハンマービームはイギリスの方式で、代表的なものはウエストミンスター寺院で見られますが、もともと中世後期の邸宅などに使われていた方式で、スパンを大きく飛ばすために使われた方式です。また、玄関の上のアーチのところには石が並んでいますが、この石の切り方、並べ方はフランスのブッサール方式です。バロック時代の1570年ごろにイタリアやフランスの宮廷建築にさんざん用いられました。そのほかにも色んな様式がとり入れられています。鉄川さんは、このような技術の情報を神父さんから得ていたということですが、いったい彼は洋行したことがあったのかということとを平戸の方にききましたところ、その形跡は一切ないとのことでした。建築技術や様式を西洋との交流の中から摂り入れてきたことは、日本人の器用さの表れですが、見たこともないものを耳学問だけでつくることのできたということは信じられないことです。

高田

今話を聞いていますと、建築の遺跡についてはずいぶんストツ

クがあつて、順番に観て行くと19世紀に日本人がどのようにしてヨーロッパの建築を学んできたかということが追体験できます。一方、先ほど安高先生にお話を伺いました遺物あるいは日野江城跡、原城跡といったものを、例えば博物館に展示するようなことはありうるのでしょうか。安高先生如何でしょうか。

安高

ハコモノをつくるという考えもあります。ハコモノをつくらなくとも、フィールドミュージアムという考え方で史跡や遺跡を使つた見せ方ができます。ハコモノに頼らないやり方は可能です。

6 教会と観光

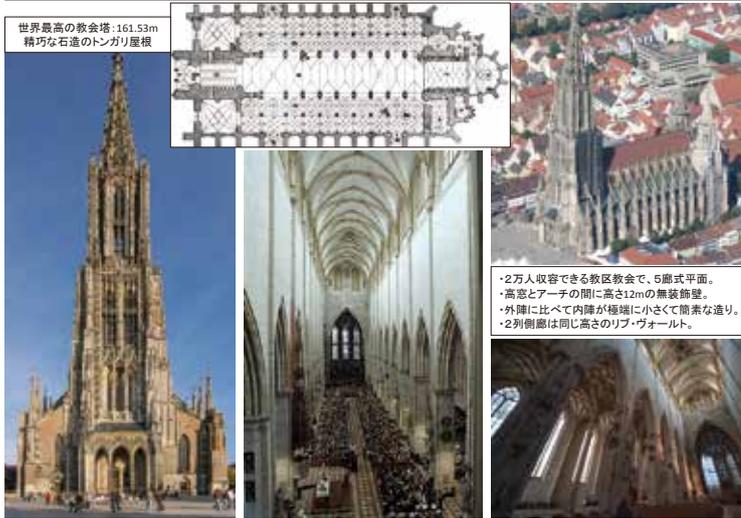
高田

有難うございました。

教会群が世界遺産に登録されますと、マスコミが宣伝しますので、たくさんのお客が教会に押しかけてくる可能性があります。教会の見学を規制するというのではなく、教会の中ではこのように振る舞って下さいよということなどが望ましく、ヨーロッパなどではそれをうまくやっているよ

ドイツ・ゴシック<正面単塔型>

ウルム大聖堂 (1337-1543年、西塔上部1844-90年)



うに思います。デ・ルカ館長、そのようなマナーとかシステムはこれからのように考えるのが良いのでしょうか。

デ・ルカ

それは悩ましいことです。現地
の信者さんたちには、教会を荒ら
されるといふ懸念や恐怖感あり
ます。共同体が小さくなってつ
ましく暮らしているところで写真
をむやみに撮ったり、聖水盤を灰
皿代わりに使われたりといったこ
とが起こっていて、当事者として
は気分が悪くなるようなこともあ
ります。現在は、タバコを吸って
はいけないとか、鐘を鳴らしては
いけないとか、静かにしましょう
といった警告の表示があります
が、例えば京都のお寺では外国人
であっても靴を脱がなければなら
ないといったマナーがあるよう
に、マナーを浸透させなければな
らないと思います。せっかく普段
教会に來ない人たちが来て下さる
のですから、キリスト教のもてな
しの気持ちですとか、相手を歓迎
する、招き入れるといったことを
実践するチャンスだと捉える方が
良いと考えます。規制も必要では
ありますが、それよりはオープン
な心を持って、祈りの心や癒しの
心を見つけてみましょうといったこと

を前に出して肯定的に受け入れら
れないだろうかと話合っている
ところです。

高田

日本人の場合、日本のお寺は、
観光の対象として多くの人たちが
拝観しています。そこでのマナー
は以前に比べますとたいへん良くな
った気がします。教会について
もお寺にならったマナーが育つも
の期待されます。

先ほど加藤先生に教会建築のお
話を伺いましたが、世界遺産の保
存と観光の関係で、例えば保管し
たものをどのように管理していく
かというシステムにつきまして、
観光との関係で加藤先生にお話頂
ければと思います。

加藤

今回この機会を使って平戸の教
会を訪ねたのですが、その一つに
宝亀教会があります。この教会も
文化財的な価値のある教会です
が、信徒さんたちの姿勢が極めて
開放的で、マネーシングを積極的
におやりになっている地域の教会
でした。もう一つの田平天主堂
は、ちょうど結婚式をやっておら
れましたが、少し厳格に信徒の場
所ということを優先されておられ



ました。

ここに分かりやすい構図があります。つまり、信徒の場所から行政が中心になって世界遺産に持つて行くことは、人類の価値を上に置くということになります。ということとは、信徒の場所と誰もが入って来れる観光の場所の両方をうまくマネージメントする方法が求められるということです。実は私は、ローマに長いこと住んでいましたが、イタリアの教会はそれなりに観光客を入れていますが、宗教的な荘厳な雰囲気捨てていく訳ではありません。マネージングがちゃんとできていて、観光の場所と信徒の場所が両立しています。ただし、平戸の教会でちょっと違うなと思ったのは、いずれも教会の規模が小さく、聖堂の中が狭いので、これは少しいへんかなと感じました。

高田

教会の規模が小さいという話が出ました。観光施設として見るとヨーロッパの教会はすごく壮大です。海外への情報発信を考えたときに、長崎の教会群は訴求効果があるのかどうかということについて加藤先生いかがでしょうか。

加藤

ドイツのウルムという町にあるゴシック教会は世界で一番高いと思います。これは世界遺産です。このようなまさにゴシック様式の壮大な教会と、田平天主堂を比較してどちらが訴求力があるかというところ、勝負にはなりません。世界遺産は目で見てどれだけ感動があるかということがポイントですが、それに代わる「ものがたり」をつくらないと駄目だということになります。

高田

韓国の李御寧という方が『縮み』志向の日本人」という面白い本を書いてあります。大きなステレオをポケットに入るようなトランジスタラジオにしてしまうようなことをソニーがやってしまいました。最近ではアップルの得意技になっていきますが、すべてのものを小さくしていくという日本のデザインもありようです。建築の場合も、非常に面白い形で凝縮されていると訴えることができるのかも知れません。

6 今後の九州のものがたり 観光に向けての提案

高田

九州には明治産業遺産のグラバー邸などがあり、さらに新たにキリスト教建築を中心にした新しい世界遺産が加わります。これらを踏まえた上で、今後、九州の観光を変えていくにはこんなことをしたら面白いのではないかとというようなご提案を、パネラーの皆様それぞれにお願いいたします。

デ・ルカ

最近では教会を訪れる人たちの要望として、ガイドさんの説明ではなく、現地のおじいちゃんやおばあちゃんに長崎弁で説明してほしいという意見が増えてきています。現在は、教会内部でこのような現地のガイドを養成しようという動きになってきています。いきなりしゃべるのは難しいのですが、少しでもしゃべって見ると、新しい発見があり出会いが生まれます。

高田

ガイドさんは出来あがったものがたりをしゃべろうとしますが、そうではなくて、それぞれの人が

自分の体験の中からのものがたりを伝えていくことが大切だと思います。安高先生いかがでしょうか。

安高

私は構成遺産でも南島原市の遺産に注目しています。その理由は、他の地域とは違っているというところがありますが、もう一つは、光の部分を支える影の遺産を有しているからです。橋本市長が冒頭に、うちは温泉がないという話をされましたが、そこにこそ本来の価値があると思っています。他にはない強みというものは、営みがある以上は必ず存在している訳で、スポットの当っていない部分にこそ真価を見出すべきだと考えます。我々は調査をしたものがたりをつくる側ですが、スポットの当っていないところを掘り起こして、地域の底上げを図っていくようなものがたりづくりが大切だと思います。

加藤

今回、平戸に寄せて頂く前に、ネットで「平戸キリシタン紀行」というツアーの募集を調べました。以前は素敵な観光バスで平戸を廻るということだったのですが、数年前に止められまして、新たに現地のボランティアの方が

ジャンボタクシー（定員10人・1人当たり5500円）を使ったガイド付きの案内を始めておられました。行ってみましたらお客は私1人でした。ドライバー付き、ガイド付き、3時間のセットとしてつくり上げられた、新しい形の聖地観光を体験させて頂きました。これが爆発的に成功するとは思いませんが、新しい観光の開拓ができるのではないかと思います。

高田

ものがたりは、ものの中にあるのではなく、人の心の中にあるということが今日改めて明らかになったのではないかと思います。これで前半のディスカッションをお開きにさせて頂きます。どうも有難うございました。

KATO Akinori
加藤晃規

関西学院大学名誉教授

〈補遺〉

ユネスコ世界文化遺産への道: 「長崎の教会群とキリスト教関連遺産」改め 「長崎と天草地方の潜伏キリシタン関連遺産」へ

1. はじめに

本年(2016年)7月25日に開催された国の文化審議会で「長崎の教会群とキリスト教関連遺産」がユネスコ世界遺産の国内推薦候補に選定された。しかし、これは、2014年9月に国内推薦候補として一度決定されて世界遺産センター事務局に提出されたものを、本年2月に取り下げ、内容を修正した上で、今年度、改めて国内推薦候補として選定し直した経緯がある。今後、この内容をブラッシュアップして来年1月にユネスコへ正式な提出を行い、2017年の世界遺産委員会で登録可否について審議されるという。そして、本稿を執筆中(8月30日)にも「長崎と天草地方の潜伏キリシタン関連遺産」へと名称を変更する方針も飛び込んできた。そこで、昨年10月の本学会シンポジウムで報告後、この一年間の変化、とりわけ再提出にいたった変更内容を追ってみたい。

2. 長崎の教会群にみられる 人々の普遍的価値

長崎の教会群を世界遺産にする活動は21世紀に入ってから顕在化した。2001年に地元でまず「世

界遺産の会」が設立され、教会群をあるがままの姿で保存するという生態保存の運動が活発になっている。その後2006年、世界遺産の国内候補選定の申請を行っているが、これにあたっては行政（長崎県）のイニシアティブが極めて顕著であった。2007年1月に世界遺産暫定リスト入り（国内分）を果たし、この時点での登録基準は(ii)(iii)(iv)(v)(vi)の5点であったという。

その後、暫定リストの期間中に数度の見直しが行われ、集落など文化的景観を加えて修正し、2016年の世界遺産センター総会で推薦審議とするべく国内候補推薦決定やイコモスの中間報告を予定していた。登録基準も(ii)キリスト教建築の物的影響、(iii)キリシタン伝統の物証、(vi)キリスト教の伝来と受容を示す歴史遺産（関連）の3点に整理され、14の構成資産を持つ「長崎の教会群とキリスト教関連遺産」として審議されようとしていた。

この時の構成資産数は14であるが施設単位で見れば22（国宝1、国重文10、国史跡2、国重文景7、県有形2）であった。外国人神父の設計・技術供与があったキリスト教関連建築が6、鉄川与助

の教会建築が4、外国人神父と鉄川与助の共作と思われる教会建築が3、設計者不詳が1、残り9はキリシタン集落の景観や史跡である。教会群とそれ以外の史跡や集落との割合はほぼ半々であるが、いずれも国内的には文化財として十分に評価され、保護対象に指定されたものばかりである。

この時点で当候補の「顕著で普遍的価値(OUV)」は、ザビエルの平戸宣教に始まるキリシタンの受容(1549年)と幕府による禁教(1613年)、続いての迫害、潜伏期、そしてキリシタン解禁(1873年)を経て、明治期の隠れ・崩れ期、最終的な憲法下の信教の自由(1889)、へと続いた約300年のキリシタンの特異な歴史ものがたりであった。そして、その物証が前述の構成資産であった。今、それらを禁教下と解禁期の時代区分で見ると、平戸の聖地と集落などは禁教下の物証、教会建築物の多くは解禁後に建設されている。全体的には禁教下の歴史を物語る性格が弱いのである。

3. 教会建築にみる

文明交流（影響）

実際、長崎県は明治維新後のキリスト教建築の普及・影響では特

異な位置にある。第2次大戦前までに建設されたカトリック教会は約半数が長崎県内で造られたし、2008年時点で日本のカトリック教会10008件の13%(133教会)が長崎大司教区に存在するという。

後世にこの結果をもたらした明治期の外国人神父の活動について、例えばキリシタン解禁後のパリ外国宣教会神父の活動に關する阿部律子氏の研究が興味深い。女史によれば1853年〜1925年の間に39名のパリ外国宣教会神父が来日しており、キリシタン解禁後のキリスト教の流布に励んだとされる。そのうちL・T・フュレやB・T・プティジャンなど10神父は教会建設を積極的に指導したと言われる(注1)。フランスにおける中世ゴシック建築がサンドニ大修道院のシュジエール院長に始まることを思えば、彼ら神父たちが建築に造詣が深かったことも頷けるのである。もっともこれらの物証は現在、多くが建て変わるか消滅してしまい、残る指定文化財も少ない。このようなもとで、キリスト教建築の影響(登録基準ii)を示すことができる構成資産は大浦天主堂や出津教会堂や大野教会堂など外国人神父の手になる遺産と、黒島天主堂や江上天主堂や頭ヶ島教

(注1) 阿部律子「長崎のフランス人神父一覽」、長崎県立大学論集 40 巻 4 号、35～45 ページ、2007 年



12の構成資産・分布図

会堂など棟梁・鉄川与助の手による擬洋風建築の遺産群であろう。前者の遺産群は、キリシタン解禁前後のまだ厳しい環境下で、伝統を重んじる信徒たちによって建設された建物群である。後者はロマネスク風やゴシック風といった西洋中世建築様式を和風の技術で模倣・洗練した鉄川与助ら工匠たちの成果である。

川上秀人は自著『長崎の教会建築史』の中で、1864年建設の大浦天主堂から1920年の黒崎天主堂に至る長崎の教会建築群36棟について、その展開を詳細に論じている(注2)。それをも

とに当時の工匠達の擬洋風建築の特徴をまとめてみる。まず木造の小屋根で作られる屋根構成では、単層屋根の建物から黒島天主堂で見られるような重層屋根への発展過程が見られ(旧大浦天主堂は例外)、建物平面プランで概ねバジリカ式の3廊式で建設された。また木造に始まりレンガ造へ移り、石造も見られるこの時期の完成形として、レンガ造の黒島天主堂が頂点になる。そして内部空間では、擬似のリヴ・ヴォールト天井が導入され、柱と貫(ヌキ)の木構造にアーチ型造形を組み込む工夫がなされている。そして、身廊部内部の立面にいわゆるゴシック風の3層構成(アーチとギヤラリーと高窓)が出現している。

教会建築のこのような発展は、工匠たちが旧大浦教会堂を手本として会得したのではなく、宣教師の指導で工匠たちが手造りで徐々に発展させていったものであり、この地のローカルな建築技術であると指摘するのである。

4. キリシタン集落の伝統的景観

本年2月9日にユネスコ世界遺産国内候補の推薦を取上げて以後、国際記念物遺跡会議(イコモス)の助言を受けて推薦書の見直

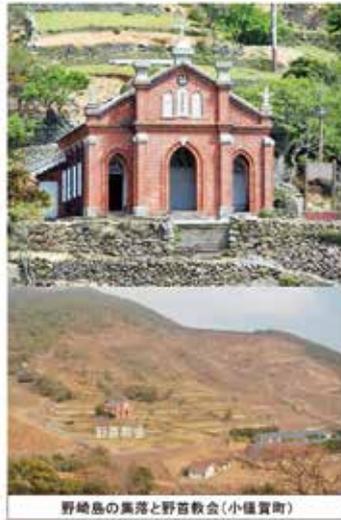
しが行われたことは前に述べた。イコモスのミッションエキスパートが再度、現地を視察して各資産とOUVとの関係について精査した。日本におけるキリスト教コミュニティの特殊性は2世紀以上にわたる禁教の歴史にある(イコモス中間報告)ことから、禁教期に焦点を当てる「顕著な普遍的価値(OUV)」を記述する方針に転じ、これを「長崎地方の潜伏キリシタンが禁教期に密かに信仰を続ける中で育んだ宗教に関する独特の文化的伝統を物語る顕著な物証」(傍線筆者)とした。その結果、日野江城跡と田平天主堂の2資産は禁教期との関連を示す物証がないことから削除された。

現在、来年の1月に正式提出する推薦書を作成中と聞けが、そのタイトルは、①大浦天主堂(長崎市)②外海の出津集落(長崎市)③大野集落(長崎市)④黒島の集落(佐世保市)⑤平戸の聖地と集落・春日集落と安満岳(平戸市)⑥平戸の聖地と集落・中江ノ島(平戸市)⑦久賀島の集落(五島市)⑧江上集落(五島市)⑨原城跡(南島原市)⑩野崎島の集落(小値賀町)⑪頭ヶ島の集落(新上五島町)⑫天草の崎津集落(天草市)の12構成資産となっている。

(注2) 川上秀人、「長崎の教会建築史」、三沢博昭(著)『大いなる遺産 長崎の教会』146～199ページ、智書房、2000年



瀬田の続く春日集落と安満岳(平戸市)



野崎島の集落と野首教会(小湊町)



天草の崎津集落と崎津教会(天草市)

大半がキリシタン集落で教会は大浦天主堂だけである。平戸以外の上記の各集落はキリスト教会堂が残るが、ここでのOUVはむしろ禁教下の信徒活動であり、明治期の解禁後の教会建設はこの信徒活動があつての価値というわけであろう。例えば、④黒島の集落は18世紀から外海地方から潜伏キリシタンが入植し、彼らは

1873年にキリスト教が解禁される以前に宣教師からカトリック教理や洗礼の指導を受けていて、早くから「カトリックの島」となっていた。解禁後全員がいち早くカトリックへ復帰したが、当初は信仰組織の指導者宅を仮聖堂とし、1880年に信徒たちが竹や松材などの地元で産出する資材を寄付して最初の小教会堂を建

設したという。その後、1897年に来島したフランス人マルマン神父の設計で現在の教会建設が始まり、1902年に完成した。黒島の集落にはこうした歴史を物語る独自の文化的景観があるという。

一方、野崎島の集落(野首・舟森集落)には町が管理する野首教会が残るのみで、集落住民は全員離島してしまっている。それでも集落跡が厳しいキリシタン時代を示す物証なのである。また、天草の崎津集落は、「天草崩れ」の時期に隠れキリシタンが諏訪神社(仏教徒のコミュニティ)と崎津教会を等しく崇敬した独特の伝統が残る集落である。いずれもキリシタン集落の文化的景観を物証にして、キリシタンの伝統(登録基準 iii)を前面に押し出し、禁教下の信徒の生活行動を人類の普遍的価値として示すようである。

古代からの 九州のものがたりと 観光地域づくり



DAIKOKU Iseo

大黒伊勢夫

学会特別顧問・西日本鉄道(株)・西鉄旅行(株)監査役

この学会の特別顧問を仰せつ
かっています大黒です。
宗像・沖ノ島の関連遺産群とこ
れに関わる九州のものがたりにつ
いて話をさせて頂きます。宗像大
社の御祭神は、田心姫神(たごり
ひめのかみ)、瑞津姫神(たぎつひ
めのかみ)、市杵島姫神(いちき
しまひめのかみ)の宗像三女神で
すが、日本書紀では道主貴(みち
ぬしのむち)という異名で呼ばれ
ています。あらゆる道を導く神と
して崇敬されていたということだ
す。「貴」は神様に対する尊称で

1

宗像・沖ノ島と厳島神社

宗像大社

宗像三女神・道主貴(みちぬしのむち)

田心姫神(たごりひめのかみ)	沖津宮
瑞津姫神(たぎつひめのかみ)	中津宮
市杵島姫神(いちきしまひめのかみ)	辺津宮

伊勢神宮

天照大神・大日靈貴(おおひるめのむち)

出雲大社

大国主命・大己貴(おこなむち)

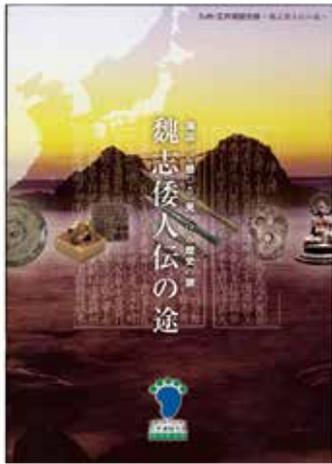
九州に関わるアジア大陸との交流

57年	倭の奴国 後漢に朝貢、金印を受ける
239年	邪馬台国卑弥呼 魏に朝貢、倭に使者
527年	筑紫磐井の乱
607年	遣隋使はじまる
630年	遣唐使はじまる
663年	白村江の戦
664年	水城築造。翌年 大野城、基肄城建設。その後 太宰府政庁整備
894年	菅原道真 遣唐使 廃止建議
1161年	太宰大貳 平清盛 博多に袖の湊 構築
1274年	元寇 文永の役
1281年	弘安の役
1592年	文祿の役 名護屋城建設
1597年	慶長の役
江戸期	長崎(唐人町)を通じての清との交易、朝鮮通信使

して、実は、伊勢神宮の天照大神（あまてらすおおみかみ）は別名では大日靈貴（おおひるめのむち）と呼び、また、出雲大社の大国主命の別名は大己貴（おおなむち）と呼びますが、「貴」の尊称が付いていますのはこれら三つの神様だけです。このような話は自慢話になってしまつて官司からはなかなか言えないと思いましたが、私から紹介させて頂きました。大和朝廷が成立する過程で、いかに宗像が高い位置づけにあったかということを「道主貴」という異名が物語っています。

大陸・朝鮮半島と宗像の間を結ぶ「北海道中」という道すがらにあつて、古くから沖ノ島は大陸との海上交易の安全を祈る重要な場所でした。その後、遣隋使・遣唐使が行われる中で、4世紀から9世紀までの間、航行の安全を祈る国家的祭祀がこの地で行われてきたということです。沖ノ島の祭祀は4つの段階を経ているということですが、それぞれの時代の祭祀に備えた品々が8万点の国宝として残されており、沖ノ島をして「海の正倉院」と言わしめています。遣唐使はその後894年まで20回行われました。菅原道真が20代目の大使となったときに自ら廃止の建議をして取り止めになり、遣唐使が終わるのに合わせて沖ノ島での国家祭祀が終了することになります。さらに時代が進みまして、12世紀半ばになりますと平清盛の時代になります。清盛は太宰の大貳、「袖の湊」と呼ばれる港を整備して日宋貿易に力を入れます。このとき海上の安全を祈願する場として厳島神社を崇拜し、社殿を建てることになりました。菅原道真が遣唐使を止めなければ、沖ノ島での国家的祭祀は続いたのかもしれませんが、このような歴史の流れの中で、今度は厳島神社が宗像の三女神を祀る神社として海上に造営されることになりました。厳島神社は、厳島を御神体としており、宗像大社と沖ノ島との関係に形態が似ています。厳島神社はご神体たる厳島を傷めないように海上に神殿がつくられたのです。

いずれにしても、不思議な縁ですが、この厳島神社は20年前に世界遺産に登録されており、海との交易の安全を守る宗像三神を祀り続けている宗像・沖ノ島が世界遺産に登録されれば、宗像三神を祀る2つの神社が揃って世界遺産になることとなりますので、たいへん喜ばしいことだと思います。宗像・沖ノ島についてこれから議論する訳ですが、登録された後の保



2010年5月 玄界灘観光圏
福岡市、糸島市、唐津市、玄海町、杵岐市

「魅力ある九州の物語 百選」九州物語委員会

「魅力ある九州の物語 百選」		
(1) アジアとの交流	(3) 歴史・神話・いにしえの世界	(6) 近代化・産業化
37 倭遣書真実伝・魏志倭人伝	57 天孫降臨神話	81 集城館事業
38 倭寇遺失	58 天の岩戸神話	82 福元治志
39 百濟王伝説	59 神功皇后	83 大隅重信
40 漢書紀	60 吉野ヶ里遺跡	84 八幡製紙所と長崎造船所
41 元寇	61 朝馬台園伝説	85 九州の筑紫王
42 天孫けしん横濱	62 松浦使用殿伝説	86 藤原白河
43 名護屋城(朝鮮出兵)	63 大宰府	(7) 戦争と維新の時代
44 陶工楽歌	64 平家落人伝説	87 ホテル
45 醫薬通信使	65 かっぱ伝説	88 勇たらの大和/YAMATO
46 雑文	(4) 武士の時代	89 長崎の鐘
(2) 西洋との交流・キリストの物語	66 黒田如水	90 宮切草太郎
47 蘭船伝説	67 加藤清正	91 宮崎のしん馬島台園
48 フランシスコ・ザビエル	68 島津義弘	(8) 芸術
49 大友次郎	69 徳王の門	92 春日の三石重門
50 天正少年遠征伝説	70 宮本武蔵	93 藤野金吾博士
51 キリシタン御任	71 室蘭	94 青木堂と坂本堂二部
52 天草・島原の乱	72 広瀬淡宮	95 田中一村
53 出島(長崎奉行)	73 徳賢の徳方に	96 滝廉太郎
54 開れキリシタン	74 肥後の石工	97 古賀経男
55 薩摩藩英米留学生	(5) 幕末・明治維新	98 昭和ライブハウス列伝
56 キリスト教伝説	75 島津重豪	99 九州の歌
	76 島山村中	100 九州の詩経
	77 藤ぶが如く	
	78 天理院風説	
	79 江藤新平	
	80 西京戦争	

「魅力ある九州の物語 百選」九州物語委員会 2008年5月

だけで、西南学院のキャンパスの中にも元寇防塁が残されています。豊臣秀吉の時代には、名護屋城が建設されて朝鮮出兵がおこなわれます。江戸時代には長崎を中心とした中国との交易や対馬を経由した朝鮮通信使。このような歴史のいずれについても九州抜きには語れないということです。

実は、2005年に九州運輸局が監修して「九州遺産」という本を出しました。これは、明治以降の100の近・現代遺産をまとめたものですが、好評を得て現在も本屋に置いてあります。引き続き、「九州物語委員会」というものを設置し、九州の物語を活用して観光振興をしようという試みをしたことがあります。そのとき私は、ちようど九州運輸局長でした。市町村や観光協会から1200ぐらいの物語が出てきましたが、それを東京・大阪・福岡の旅行者や旅行者にアンケート調査をして、九州を旅するにあたって魅力的な物語を、まず、100選として選出しました。

100ほどの物語のうち、3分の1は「のだめカンタービレ」や「がばいばあちゃん」といった完全なフィクションでしたが、残りは歴

駐日外国大使館との交流会 平成25年1月 観光庁・奈良県



奈良県

祈りの回廊フォーラム
平成25年1月

奈良県・奈良新聖

史、伝記、神話といったものが並びました。それを詳しく見てみると、先ほど申しました「アジアとの交流」や「中世を中心とした西洋との交流・キリシタンの物語」、さらには「幕末・明治維新」や「明治の近代化・産業化」といったジャンルが挙がっています。従いまして、過半がアジア・西洋といった海外との交流、そのフロントとしての物語であるということになります。

九州物語委員会の中でいろいろな提言をしており、物語を活かして観光地域づくりをするという提言もありましたが、福岡市、糸島市、唐津市、玄海町、壱岐市は国の観光圏整備法に基づいて「魏志倭人伝の途」というテーマで「玄界灘観光圏」の計画をつくりました。宗像・沖ノ島も広くは玄海灘地域に含まれますので、世界遺産登録の話が進めば、先ほどの自治体に宗像市などを含めて新たな「玄界灘観光圏」を作り直すという話も今後出てくるかもしれません。

2 九州の3つの世界遺産 と九州広域観光

これまで、九州は世界文化遺産がまったくない空白の地域でしたが、明治日本の産業革命遺産が登

録され、続いて長崎の教会群とキリスト教関連遺産も登録間近でありますし、宗像・沖ノ島もこれに続くこととなります。3つの世界遺産が登録されると、これらは広域に分散して存する新しい形の遺産群でありますので、九州一帯が世界遺産に満たされるという状況が生じてくる訳です。そういった新しい時代に対応して3つの世界遺産を別々に考えるのではなく、九州全体が海外との交流の歴史を持つていっていることをベースにして、共通したイメージを出していくことが必要だろうと思えます。そのような思いを込めまして、今回のシンポジウムで「九州広域観光シンポジウム」としております。

また、3つの世界遺産が登録されれば、遠くから訪れる人たちはこれらの遺産をどのように見て回るかということを考えることとなりますので、世界遺産センターといった情報発信の拠点が必要になるのではないかと考えます。例えば九州国立博物館は、3つの世界遺産の情報を発信し続けることができる機能を持っていますので、先ずはここにそのセンター機能を持たせ、九州を訪れる人たちがそこに行って情報を得て、それぞれの遺産を訪ねるといった新し



い体制が必要になるのではないのでしょうか。

4 今回のセッションの意義

本日は、厳島神社の世界遺産登録を経験された宮島観光協会の中村会長、これから世界遺産登録を迎えられる宗像観光協会の小林会長という観光関係者の方のみならず、世界遺産の構成遺産となる宗像大社の葦津宮司、また地域との関係を重視して観光まちづくりを進めておられる太宰府天満宮の西高辻宮司にもおいで頂いています。

この写真は、2年ほど前に観光庁と奈良県、奈良県内の2社7寺が連携して東京で観光誘致を目的として開催しました「祈りの回廊フォーラム」の様子ですが、春日大社、石上神宮、東大寺、興福寺、薬師寺、唐招提寺、法隆寺などの宮司や管長の方たちに参加して頂きました。そのあとで各大使館に声をかけまして交流会を開催しました。通常、観光庁や奈良県だけでお招きしてもなかなか大使の方たちにご参加頂くのは難しいのですが、やはりこれだけの宮司さんや管長さんが来られるということでも多くの大使の方たちにお越し頂きました。

これからの観光の中で、神社やお寺は観光資源として大事な位置付けにあり、著名な神社の宮司さんや管長さんの位置づけの重さや発信力というものがますます、地域づくりにおきましても、そのリーダーシップは極めて重要であろうと思っております。本日は葦津宮司、西高辻宮司にご参加頂きまして、たいへん有難うございます。これを機会に、今後とも、観光関係のいろいろな動きとの連携をとって頂ければと思います。以上、特別セッションのプログラムとして、今回のシンポジウムの狙いのご紹介も兼ねながらご説明させて頂きました。有難うございました。

古代・中世の大陸との交流に おける九州の役割と そのものがたり



——「宗像・沖ノ島と関連遺産群」の世界遺産登録と地域づくり——

登壇者

葦津敬之

宗像大社宮司

西高辻信良

太宰府天満宮宮司

中村靖富満

宮島観光協会会長

小林正勝

宗像観光協会会長

コーディネーター

豊田徹士

豊後大野市歴史民俗資料館

0 はじめに

豊田（コーディネーター）
皆様こんにちは。

コーディネーターを務めさせて頂きます豊田と申します。先ほどのプロログでは大黒様から、宗像・沖ノ島の世界遺産登録に関することや九州のものがたりなどにつきまして、これまでの流れをご説明頂きました。これからは、パネラーの皆様それぞれが関わってこられたことをご紹介頂きながら、「神宿る島」宗像・沖ノ島と関連遺産群の世界遺産登録に向けての課題や地域づくり等の手法につきまして議論していきたいと思えます。まずは宗像大社の葦津宮司から、宗像・沖ノ島の世界遺産登録に関する申請概要や宗像大社の歴史といったことについてご説明をお願いいたします。

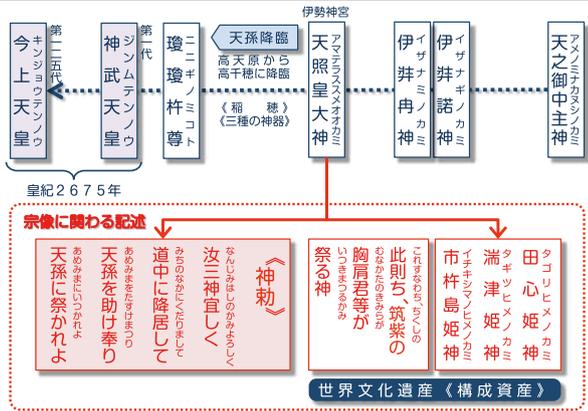
1 神社の歴史と宗像の神々

葦津

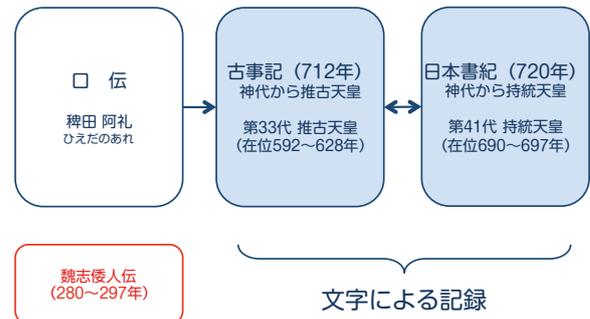
本日はこのような席にお招きいただき、たいへん光栄に存じております。

神社の歴史は長く2000年以

日本神話と宗像の歴史



日本神話の誕生



上は簡単に遡ることができ、神社の歴史については研究者の方たちが様々な角度からひも解かれますが、先ずは神社界の歴史の捉え方の基本的なことをお話しさせて頂き、その中で宗像がどのような位置付けにあって、世界遺産の構成資産とされているかということをご説明したいと存じます。

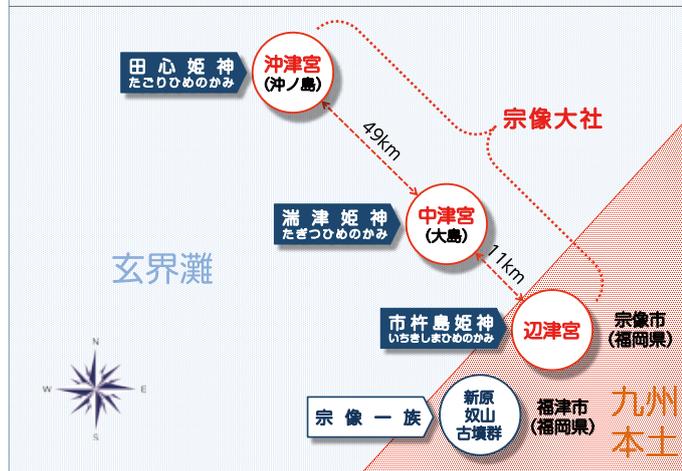
日本神話は、今から1300年前に文字の文化がもたらされて紙媒体に記録できるようになって古事記や日本書紀として編纂されたものです。稗田阿礼という極めて記憶力のいい人の口伝に基づいてまとめられています。我々神社界では、この古事記、日本書記を基本にして歴史を辿っていきます。

文字文化以前の口伝は極めて非文明的なものだと思われがちですが、実はそうでもなく、民俗学の先生たちはかなり精度が高いと仰います。フィリピンのルバング島で30年間にわたってゲリラ活動をしていた小野田寛郎さんが日本に帰って来られた後に、「わが回想のルバング島」という本を出されています。この本を読むと、何月何日に何をされたかということが記述されています。私は、小野田さんに、日誌を付けておられたのですかと聞いたところ、全て頭

の中の記憶によるものだと言っておられました。我々は今の文明を基準に過去にさかのぼろうとしますが、昔の人の方がいろんな部分で長けていたのではないかと、我々以上の能力を持っていたのではないかと、そういう見方で歴史を見ないといけない、特に宗像の歴史を語る上では、このような視点が極めて重要になります。

日本神話は、最初に天之御中主神(アマノミナカヌシノカミ)が誕生して、その後色々な神様が出てくるのですが、伊弉諾神(イザナギノカミ)、伊弉冉神(イザナミノカミ)が出てきて、天照皇大神(アマテラスオオミカミ)という天皇直系の皇祖神が誕生されます。宗像の神は天照皇大神の姫神三神で、先程のお話に出てきました田心姫神(タゴリヒメノカミ)、瑞津姫神(タギツヒメノカミ)、市杵島姫神(イチキシマヒメノカミ)です。さらに、筑紫の胸肩君(ムナカタノキミ)ということで宗像一族の話が日本神話にも記述されています。宗像の大きな特徴としてご神勅が下っていますが、これはのちほど詳しく説明させていただきます。

「神宿る島」宗像・沖ノ島と関連遺産群《構成資産》



神勅 (しんちよく)

神勅 (しんちよく)
 天皇の皇祖神である天照大御神が宗像三神に下された命令
 日本最古の歴史書『日本書紀』(720年)に記述

いましみはしのかみよろしく
 汝三神宜しく
 みちのなかにくだりまして
 道中に降居して
 あめみまをたすけまつり
 天孫を助け奉り
 あめみまにいつかれよ
 天孫に祭かれよ

2 宗像と宗像一族、
宗像分社

今回の世界文化遺産の登録にあたりましては、三神を祀る三宮とこれを支えた宗像一族の古墳が構成資産となっています。構成資産を表したのがつぎの図です。長女の田心姫神を祀る沖津宮は沖ノ島に、次女の瑞津姫神を祀る中津宮は大島に、三女の市杵島姫神は九州本土の辺津宮に祀られています。この三宮を合わせて宗像大社と言いますが、この三柱の神とさらに先ほどお話しました宗像一族の古墳とされる新原・奴山(しんばる・ぬやま)古墳群の大きくこの4つで構成されるのが宗像の世界遺産です。

先ほどお話いたしました神勅ですが、これが宗像大社の根幹をなすものです。天皇の皇祖神であります天照皇大神がご命令を下されたものを神勅と言いますが、日本神話の中にそうたくさんはありませぬ。その内容は、「歴代天皇をお助けしなさい。そうすれば、歴代天皇があなたたちを祀るでしょう。」というご命令です。「歴代天皇をお助けしなさい」のところまでは何となく分かります



全国奉斎数 6,226 社

①	広島	424
②	群馬	305
③	兵庫	297
④	愛知	277
⑤	埼玉	271
⑥	福岡	253
⑦	千葉	249
⑧	栃木	220
⑨	山口	218
⑩	大分	206



が、最後のくだりが極めてユニークです。これがのちほど紹介します沖ノ島における祭祀の根源になっています。大和朝廷の国家祭祀の場所が沖ノ島となります。従いまして、当時最高のものが朝廷によって沖ノ島に納められましたので、出てきたものはすべて国宝であるという由縁もこのご神勅から分ります。

では、宗像一族は何をやっていたのかと言いますと、海外との交流・交易です。最初は朝鮮半島とのやり取りでしたが、最後のころはマカオまで行くといったように、かなり壮大に動いた海洋民族、海人でした。よく宗像の祭祀は、航海の安全を守るためということが言われますが、これはおそらく民間信仰から出た話で、宗像の元来の祭祀は国家の安泰ということが中心です。では、「天孫（あめみま）を助け奉り」という部分はどういうことであつたかということですが、これはなかなか断定はできないのですが、当時は大和朝廷と一緒に外交交渉をやっていましたので、交流や交渉をうまくやって、日本国内に繁栄をもたらさなさいというご命令であつたのではないかと私は解釈しています。それがうまく続けば、「天孫に祭かれよ（あまみ

まにいつかれよ）」、すなわち、歴代天皇が沖ノ島で祭祀を行いますよという趣旨であつたのだろうと思います。

これは、昭和19年に神社が国家管理の時代に調査した宗像三神の分布図です。私は宗像に来る前までは、日本海側に宗像の分社が多いと思っていました。しかし、地図にプロットしますと太平洋側に多いことが分かりました。6226社の分社がありますが、一番多いのは広島です。厳島神社と宗像大社とは親子のような関係ですので、広島に多いのは理解できる場所です。2番目が群馬です。ベストテンを見てみますと、群馬、埼玉、千葉、栃木といった関東エリアに分社が多いということが特徴です。また、分社のもう一つの特徴は、比較的山間部に入っているということ。北部九州にはやはり海人族の安曇族がありますが、こちらも信州長野県の山の中などに入っています。宗像族は外海の民ですが、安曇族は内海の民ということで棲み分けをしており、例えば安曇族の多い長野県には宗像の分社はほとんどありません。

3 宗像・沖ノ島の世界遺産登録に期待すること

これはポスターなどでよく使われている沖ノ島出土の金製の指輪です。実は、学術的には大陸からもたらされたものではないかと言われています。しかし、右側の朝鮮半島から出土した金製指輪と比べますと、沖ノ島の出土品は細工が細かいのが特徴です。今から1300年から1400年前の6世紀から7世紀には、奈良の法隆寺が建立され、伊勢神宮の式年遷宮も確立されていました。このころの日本にはかなりの技術があり、沖ノ島の指輪も日本人の手でつくられていた確率が高いと私は考えています。世界遺産登録によって、解明がなされていくものと期待しています。

このように歴史ある宗像ですが、分らないこともたくさんあります。先ほど話しましたように、沖ノ島にはいろんな神宝がありますが、どのようなプロセスでどこでつくられた

たのか。あるいは、宗像一族は航海術に長けていたと言っていますが、造船技術はどうだったのかということも分かっておりません。また、これだけダイナミックな動きをしているながら資金源についてもまったく分かっていません。このようなことも、世界遺産になることによって解明されていくのではないかと期待しています。

豊田

有難うございました。この沖ノ島と宗像大社の歴史的なストーリーはたいへん分かりやすいすつきりとした話の流れになっていて、世界遺産になることは、私ども文化財に係わるものとしてはごく当たり前のことではないかと思っております。そのような流れの中で、宗像の観光協会として、世界遺産の申請についてどのように受け止めておられるか、宗像の現状も含めて小林会長にお話を伺いたいと思います。

4 宗像・沖ノ島と関連遺産群の世界遺産登録と観光

小林

宗像観光協会の小林と申します。よろしく願います。

世界遺産登録に対する我々地域の期待ということでございますが、実はこの関連遺産群については、まず皆様にご理解いただきたいのは、保存しなければならぬ遺産と開示しなければいけない遺産とがあるということです。世界遺産というのは比較的コマーシャルが先行するものですから、世界遺産イコール観光という捉え方で煽るような傾向があります。しかしながら何よりも、世界遺産登録によって宗像地域や宗像という名前がきちんと理解してもらえないようになるのではないかと思っております。これまでは宗像を「しゅうぞう」と読んだり、言葉として理解してもらえなかったり、記憶に残して頂けないといったことがありました。これからは宗像という地域や名前を多くの方々に理解してもらえるようになるのではないかと、正しい宗像の情報を発信していくことができるのではないかと、先ずそのようなことを期待しております。

また、いにしえの時代から先人たちが生み出し、守ってきた文化や伝統を、訪れる方たちに伝えるための正しい仕組みをつくって情報発信していきたいと考えています。玄界灘という海洋を目の前に置いた宗像の地でござりますの





で、地域の中には今も漁業に携わっておられる方たちがずいぶんおられます。現在私たちは、食と観光という発想でいろんなことに取り組んでおりますが、その土台の役割を果たしているのは海人の末裔である漁業者の方たちです。地域の中に海人族としての多くの漁業者が残っていることそのものが、先人たちがつくってきた伝統の底力を持ち続けている証であると思います。

先ほど宮司が、宗像大社の歴史やそのポテンシャルの高さについてお話をされましたが、大社を取り囲む地域にいる民間の我々が、いかに一緒になって今後成長していくかということに大きな期待を持って取り組みを進めていきたいと考えております。

豊田

ありがとうございます。重要なのは正しく伝えるということであり、また、地域のイメージの定着であるといったたいへん貴重なご意見でした。このようなことがなければ世界遺産の登録は難しいことであろうと思います。

つぎに、宮島はまさに地域のイメージができあがっているところだと言えますが、宮島観光協会会長の中村さんに、世界遺産である

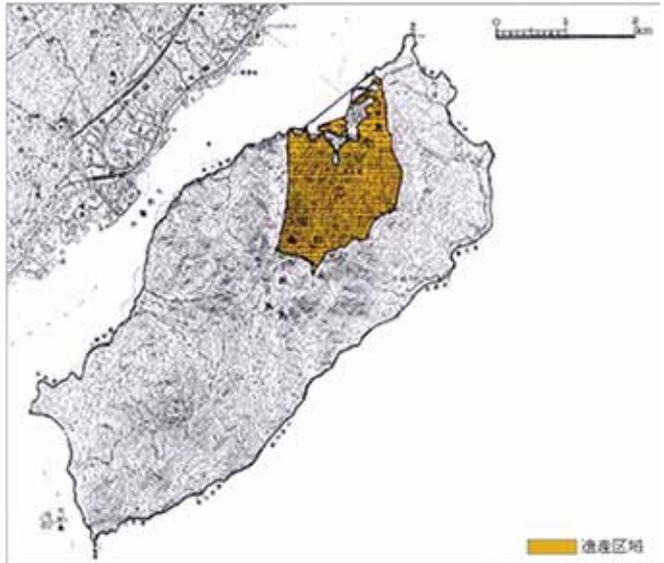
厳島神社の概要と観光の動向についてお話し頂ければと思います。

5 厳島神社の概要と世界遺産としての価値

中村

宮島観光協会の中村でございます。よろしくお願いたします。まずは厳島神社の概要をお話させていただきます。厳島神社は推古天皇の元年593年に、地元安芸の国の豪族であった佐伯鞍職（さえきくらもと）が市杵島姫のご神託により創建したと伝えられています。そして、「いつき島に祀れる神」ということから厳島神社と呼ばれるようになったとされています。原始宗教の自然崇拜の名残で島全体が神の島として崇められていたもので、陸地に建物をつくるのは畏れ多いということで、潮の満ち引きする砂浜に社殿が建てられました。海から参拝するということで大鳥居も砂浜の上に建てられており、社殿の造りは松皮葺寝殿造であります。御祭神は宗像大社と同様に、天照大神の子である三女神の田心姫神、瑞津姫神、市杵島姫神でございます。

そして、平清盛が久安2年（1146年）に安芸守として任官されまして、平家の守護神とし



て尊崇し、平家の栄華の象徴として任安3年（1168年）に社殿を現在の姿に造営しました。都から後白河上皇ほか皇族や貴族が訪れたために、都の文化や建築が宮島に入って参りました。現在も厳島神社で伝承されている舞楽は、平清盛によって大阪の四天王寺から移されたものです。なお、厳島神社には、国宝・重要文化財の建造物が17棟3基、美術工芸品55点など約260点がございます。

平成8年（1996年）の12月に世界遺産に登録して頂きました。世界遺産に指定された区域は、社殿を中心とする厳島神社と前面の海、天然記念物の弥山（みせん）の原始林を含む森林区域431・2ヘクタールで、厳島全体の14%を占める広い範囲にわたっています。

厳島神社は弥山という535メートルの山が中央にございますが、この山を中心として深々とした緑に覆われた山容を背景に、海上に鮮やかな朱塗りの社殿群を展開するという世界でも例を見ない構想のもとに、独特の景観をつくり出していることが世界遺産登録の大きな理由でございます。

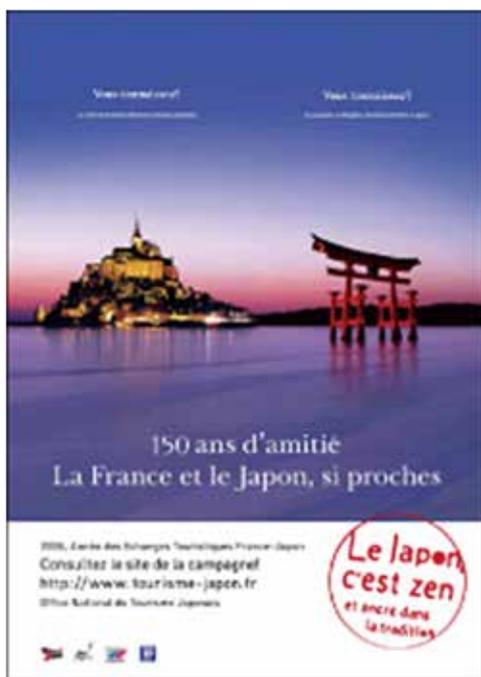
また、厳島神社の世界遺産価値

として、「日本独特の風土に根差した宗教である神道の施設でありながら、仏教との混交と分離の歴史を示す文化的遺産としても日本の宗教空間の特徴を理解する上で重要な根拠となる」ということが挙げられています。神社の裏側に大聖院さんというお寺と大願寺さんというお寺がありますが、江戸時代までの神仏習合の時代には、神社さんと2つのお寺とが厳島伽藍と呼ばれていました。大聖院さんは主に祭祀の催行をされる別当職、大願寺さんは造営や勧進といったお金の管理をされる本願という役目を担っておられたようでございます。

宮島の風習としては、神の島でございますので火葬、埋葬ができません。そのため施設もございませんので、宮島のご遺体は神社を避けて、西で亡くなられた方は西の港から、東で亡くなられた方は東の港から対岸へ移送して火葬、埋葬するような習慣がいまだに残っております。

6 宮島観光の動向

19年前の平成8年（1996年）12月の世界遺産への登録以降の観光の動向、変化について少し



お話をさせていただきます。先ず来島者数ですが、宮島の場合は50年ほど前から船舶に乗られるお客様の数を来島者数としてかなり正確に数えております。50年前の昭和39年（1964年）は来島者が212万人で、宿泊者数が15万人。平成8年（1996年）の世界遺産登録のときには来島者が298万人で宿泊者が46万人でございました。

そして、平成25年（2013年）が過去最高で、来島者が408万人で宿泊者が38万人ということで、世界遺産登録後はお客さまが25%、100万人ほど増加しています。少子化の影響で修学旅行などが減り、宿泊者数は下がっておりますが、旅館の稼働率は現在も軒並み8割を超えていますので、かなり順調に推移していると思います。

一方、外国人観光客、特に欧米の方がたいへん増えて参りました。日本全体を見ますとアジアの方が7割で欧米の方が3割ということをお聞きしていますが、広島・宮島地区は逆の数字です。アジアの方はブランド品や電化製品の買い物、あるいは温泉やテーマパークに行くのが目的のようですが、広島・宮島地区はそのようなことは違った志向の外国人の方たちが訪れておられる地域だろうと思います。また、ミシュランの

観光ガイドブックで三つ星を頂いたり、平成21年の日仏交流150周年の節目の年には、フランスに厳島をアピールするためにポスターがつくられたりしました。モンサンミッシェルの修道院と厳島神社の大鳥居が同じ海の上に浮かんでいる構図のポスターです。こういったことをきっかけにして両市は観光友好都市の提携を結びました。具体的な交流はこれからではありませんが、市長をはじめ観光協会や民間からも表敬訪問して、ノベルティを配布したりといった活動をしていきます。

つぎに、世界遺産の登録後、宮島の観光はどのように変わったのかということについてお話しさせていただきます。これまでは、日本三景の一つであり厳島神社の門前町ということで、神社への参拝のお客さまで生業を立てさせて頂いております。国内のお客さまが中心で、3時間ぐらいで参拝と食事と買物を済ませ、ガイドさんに連れられて出ていかれるという流れでしたが、外国からのお客さまが増えることによって、滞在型や個人旅行も増え、独自のプログラムを組まれて宮島に入ってきて来られる観光される方もいらっしやいます。弥山に登られる方に聞きます

と、厳島神社の海拔ゼロメートルあたりは日本人と外国人の比率は10対1ぐらいで日本人が多いけれど、標高が高くなるにつれて外国人の割合が高くなり、頂上では8割ぐらいが外国人だそうです。弥山の奥には磐座（いわくら）と呼ばれる大きな岩がごろごろしている場所があり、パワースポット体験プログラムなどに参加される方もいらっしやいます。また、不思議なことに、外国のお客様に日本のお客様が感化されるという状況があります。

最近では広島の色んな大学が宮島に拠点を置いて文化、歴史、習慣、建造物などについて研究され、講演会なども行われています。そのほか、外国人向けの宿泊施設の充実も進んでいます。私どもの隣のホテルでは6割ぐらいが外国からのお客様だそうです。お土産物につきましてはこれまでは、しゃもじや宮島の伝統工芸の細工などでしたが、最近は刀や佛像、浴衣、法被といった日本文化を象徴するようなものが売れるというところをお土産屋さんがおっしゃっておられます。以上でございます。

豊田

ありがとうございます。宮島

では、いわゆる大規模観光ではなく、ものごたり観光的な動きがすでに始まっているということが分かりました。

もうおひと方、パネラーとして太宰府天満宮の西高辻宮司をお招きしております。太宰府天満宮は、合格祈願などで九州だけではなく全国にその名を知られている大きな神社で、大成功を収めておられます。本日も多くの方が参拝に来られているとのこと。西高辻様からは、太宰府の歴史・文化を観光にどのように活かしておられるのか、またそのことを地域にどのように結びつけておられるのかといったことをお聞かせ頂ければと思います。

7 九州の歴史・文化の ストックの場としての 九州国立博物館

西高辻

太宰府天満宮の西高辻でございます。

「福岡には観光地がない。太宰府だけですね」というようなことをよく聞きます。これは、北部九州に住んでいる人の人柄によるものではないかと私は思っています。

この地域の人たちは、未来のことに関してはいへん興味を持つ

ですが、過去の歴史については割と無頓着で、また好きやすく飽きやすいという特徴があります。実は私は、北部九州ほど面白いところはそうはないですし、こんなに豊かなところもほかにはないと思うのですが、この時代に生きていて、この豊かさをなかなか感じる事ができないのが北部九州の人たちです。

なぜ太宰府に九州国立博物館ができたのでしょうか。この博物館を誘致するために私の家は4代かかりました。17年かかって、ちょうど10年前にオープンしました。うちの4代前の先祖はたいへん面白い人で、明治6年（1873年）に太宰府博覧会を開きました。ちょうどウィーン万博に日本政府として初めて参加した年です。それまでは、寺社の宝物は一般の人たちには絶対に見せませんでした。明治という時代が来て寺社の宝物を一般に見せるようになりしました。その走りの博覧会を太宰府でやったのです。そのときに私の先祖たちが憂えたことは、九州はこれだけの歴史と文化を持ちながら、何もストックできていないということでした。例えば、大陸から様々なものがこの北部九州を通じて日本に広がって行きました。しかしながら、お茶も、お

菓子も、饅頭も、そばも、うどんも、この地は本家になっていません。すぐにスルーしてしまうんですね。これが北部九州人の特徴です。だからこそストックする場所がどうしても欲しかった。九州のこれから100年、200年先を考えたときに、ストックする場所として国立博物館が必要でした。だからこそ、私の先代の時に太宰府天満宮が持っていた土地の3分の1を福岡県に寄付して、そこに国立博物館の誘致運動をさらに推し進めた訳です。先代は博物館を見ることなく亡くなりましたが、太宰府天満宮はその代々の夢の続き、思いの続きを今日までつなぎ、これから先もこの国立博物館を中心として、アジアとの交流や九州の中のストックの文化というものを、博物館とともにやっていかなければならないのではないかな、と私は思っています。

この博物館によって、世界中のものを福岡で修理することができるようになりましたし、その技術を持つようになりました。この国立博物館は、表の展示よりもバックヤードが大切です。バックヤードで人の交流をすること、文化の交流をすること、技術の交流をすること、これらが長い目で見て九州の観光の中ですごく大切な要件

になると思います。

話はガラッと変わりますが、私は宗像大社とたいへん仲良くさせて頂いています。なぜかと言いますと、毎年、全国の神主さんたちの野球大会があります。明治神宮も出ますし、熱田神宮も伊勢神宮も出ます。ご祭神の関係で出雲大社と金毘羅さんが一緒のチームです。九州は太宰府・宗像チームです。今年伊勢神宮チームを破って私たちのチームが優勝しました。これからは九州の時代だろうと私は思っています。

8 神社めぐりと地域めぐり

私が若いころ、青年会議所で国立博物館の誘致運動をやっているときに、こんなキャッチフレーズがありました。「僕らのまちは博物館」。太宰府にあるすべての文化や歴史資産はまさに博物館。それならば、このような博物館のある地域を活かしてどんなまちづくりができるか、どんな心を養うか、それがいちばん大切なことではないかと思っています。そのような意味で、九州国立博物館は、「学校よりも面白くて、教科書よりも分かりやすい」、そんな博物館をつくろうとされています。これは大

切なキーワードです。歴史的なことは、単に訪れるだけではなかなか理解できません。一方、直接目で見たこと、耳で聞いたこと、五感で感じたことは、多くの意識に影響するような気がしてなりません。先ほど、宮島の話をなさいましたが、宮島はなぜ凄いのでしょうか。それは船で渡れるからなのです。そして、ぱっと赤い大鳥居と御本殿が見えたときに、そこには日本の原風景があり、それは圧倒的なパワーを感じさせます。この装置によって歴史も文化も時間も共有することができます。

太宰府天満宮のその装置は実はクスノキの木です。1500年間、太宰府と太宰府天満宮の歴史を見続けてきた大きな老樟こそが、太宰府のシンボルなのです。これを見ることによって、菅公がどんな思いで太宰府にみえたのかを考えさせられます。実は私は、築400年の家に住んでいます。茅葺の家です。まさにこの家に明治維新の直前、三条実美以下の五卿が3年間滞在し、西郷隆盛や高杉晋作や坂本龍馬などの維新の志士が次々と私の家を訪れました。その座敷で天井を見てみますと、彼らが何を考え、何をやろうとしていたのかに思いがめぐります。太宰府は

どの時代を切っても面白い場所です。黒田如水がいた、五卿がいた、大伴旅人がいた、菅公がいた。さまざまな時代に様々な人の交流があつて、様々な情報発信をしてきました。これから先の時代も、情報発信をしていかなければ地域の魅力はできていかないと思っています。

私は39代目の宮司として、生きた神社をつくるのが天神様から与えられた使命と感じております。この時代に生きる多くの日本人や海外の人たちに感動や共感を呼ぶような神社運営をしていかなければ、これから100年、200年先に信仰として残っていかないと考えています。そのために、「神様がよし」、「地域が豊かでよし」、そして「自分たちもよし」という「三方よし」の神社づくり、地域づくりをしていかなければと考えています。

北部九州の凄さは、宗像から松浦まで、海外に行くことのできる技術を持った人たちが住んできた場所であることです。この地域の特色は、2000年間同じ方向を向きながら交流を続けてきたという点であり、今こそつぎの時代に向かつて、私たちの資産をどのように活かしていくか。それを考えることが観光の道につながる

るものと思えます。

宗像が世界遺産になり、多くの皆様に私たちの故郷がこんなに素晴らしい場所を持っているのだと認識して頂ければ、これからも楽しいものがたりがどんどん出てくることでしょう。そうなることを心から期待しております。

豊田

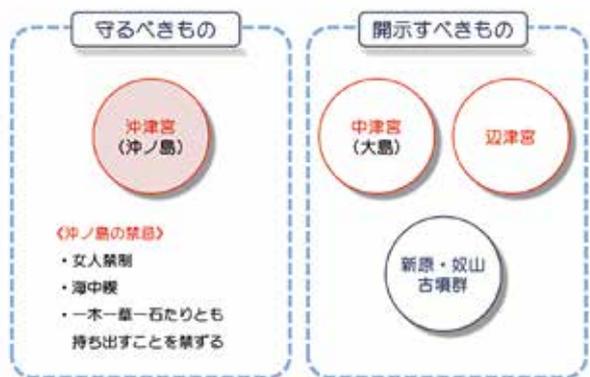
有難うございました。九州に住んでいる者にとって心に沁み渡ってくる話でした。

ところで今回、沖ノ島が世界遺産登録の対象になっているということで、いろいろと心配なさっておられる方もいらっしゃると思います。この件も含めて葦津宮司にお話を頂きたいと思えます。また、世界遺産に向けての今後の課題につきまして、小林様、中村様からご意見をお願いします。

9 宗像・沖ノ島の世界遺産登録の方向性と情報発信の取り組み

葦津

皆様にご心配頂いています沖ノ島の問題についてお話しいたします。これは今回の世界遺産登録の大きな特徴ですが、登録にあたりましては、守るべきものと開示を



沖ノ島の自然



すべきものに大きく分けられております。特に沖ノ島に關しましては、大勢の方は行くことができないということですが、現在、私どもの方で部分的に沖ノ島への渡航を許可しておりますが、登録後はかなり厳しくなります。沖ノ島には女人禁制とか一木一草一石たりとも持ち出してはいけないといったルールがありますが、これらにつきましてはすべて合意の上で申請しております。登録後は沖ノ島に行けるようになるのではないかと勘違いされている方がいらつしゃいますが、これはまったく逆で、もっともつと厳しくなるというのが今回の世界遺産登録の大きな特徴です。一方、中津宮や辺津宮、さらに古墳群につきましては大いに開示をしていくことで、宗像の歴史を感じて頂くことになっております。

世界遺産になりますと情報発信能力がかなり高まります。すでに昨年から宗像で取り組んでおりますのが宗像国際環境会議です。国内外からいろんな識者の方たちに来て頂き、大人たちの会議や中学生対象の宗像国際育成プログラムを実施しております。宗像一族は海とともに生きてきた民族でありますので、海の環境につ

いて考え、改善していくために、宗像から世界に情報を発信していくと考えております。このようなことも世界遺産になれば大きな発信力になっていくのではないかと思います。

今年の7月には、フランスのパリで開催されました気候変動良識サミットのプレイベントに、フランス大統領から育成プログラムの優秀な生徒2名がご招待いただき、ユネスコ本部にも行って宗像のことを発表いたしました。世界遺産登録で情報発信能力が高まるということであるような活動も積極的に取り組んでいく、行政とともに取り組むを進めているということです。

豊田

情報発信能力が高まるということで、多くの観光客の方たちが宗像にこられることになると予想されますが、現在の段階でどのような問題を想定されておられるのか小林様にお聞きしたいと思います。

**10 宗像観光と北部九州の
広域観光に向けての
取り組み**

小林

観光協会は民間の団体でありま



宗像国際環境会議

フランス気候変動良識サミットとユネスコ本部

フランス大統領から招待された宗像の高校生

平成27年7月21日



ユネスコ本部にて宗像のことを発表するの宗像の高校生

平成27年7月23日



すので、ハード面の具体的な形づくりといったことはなかなかできるものではありません。しかし、ソフト面では、確実に我々がやらなければならないことの中に観光ガイドラインづくりがあるかと思えます。これはもちろん世界遺産を基準にした形になる訳です。実は私が会長に就任して以来、観光協会の中に宗像観光戦略会議という組織を設けております。これは、市役所の中の観光に関わるすべての課の課長と私どもと一緒に、なつて月に一度、観光戦略という切り口で会議を開いております。そこでは、先ず現在の宗像の土俵の中で、どんな観光がありうるかということを広い視点から検討しております。世界遺産になってから慌てて考えるのではなく、今のうちに想定できることを戦略的に考えていこうという取り組みが一つの流れとしてあります。

また、北部九州の芦屋町、岡垣町、宗像市、福津市そして古賀市、新宮町が連携して、観光の民間団体「筑前七浦の会」を立ち上げて、広域での観光連携を進めています。現在は食のプロデュースですとか商品のブランド化推進のための広域連携を行っています。このような民間の取り組みとともに、玄海観光推進協議会という形で行政の中にも広域連携の組織をつくって頂き、民間と行政の両方で単に宗像だけではなく、広域的な観光の取り組みを進めていこうという流れがあります。

私たち現場でやっております民間としましては、世界遺産であるからということだけではなく、地域が持っている魅力を活かしながら、また、おもてなしの未来ビジョンを持ちながら、観光の現場からしっかりと方向付けをしていこうということで活動をさせて頂いています。

実際に大島では、自然景観を楽しむ旅の提案として、九州オルレの宗像・大島コースの認定を頂き、島内11・4キロのウォーキングコースが整備されました。オルレという言葉はあまり聞き馴染みがないと思いますが、韓国の済州島から始まったウォーキング、トレッキングでございます。このようなことも含めて少しずつではありますが、世界遺産だけではなく自然景観なども含めて、おもてなしのプログラムを考えていこうとしています。

また、民間では決められない交通アクセスにつきましては、これから宗像の地に多くの方を受け入れることができるような仕組みづくりについて幾つか取り組みを始

めさせて頂いています。行政と一緒に
緒になつての提案になるかと思
います。多くの方々を受け入れ
るためには交通アクセスの整備が
重要であると考えています。

課題はこれからまだまだたくさ
ん出てくるとは思いますが、広域
連携を含めて色んな情報を頂きな
がら、何よりも、私ども民間の現
場力を上げていく仕組みづくりを
考えていきたいと思ひます。

豊田

民間でできることを進めなが
ら、行政をいかに動かしていくか
という話だつたと思ひます。最後
に西高辻宮さんと葦津宮さんに
一言ずつお願ひして終わりたいと
思ひます。

11 神社の未来に向けて

西高辻

神社の魅力は、例えば宗像大社
にしても太宰府天満宮にしても同
じだと思ひますが、100年前に撮つ
た写真と現在の同じ場所の写真が
あまり変わらないということ
です。同じ場所と同じ写真が撮れる
ということ、環境を保全しない
とできません。宗像大社にとつて
いちばん大切な沖ノ島とその役

割、中津宮の役割、辺津宮の役割
といったそれぞれの役割の中で、
そこが我々日本人の心の故郷であ
るというその一点をきちつと環境
を守りながら保つていくことがい
ちばん大切なことではないかと思
ひます。それと同時に、日本人に
は神社は美しい場所であるという
感性があります。宮島も、宗像
も、私どもの天満宮もそうです。

神社は、どこよりも美しい環境で
日本の心を伝えていく聖地として
の役割を持つていてのではないで
しょうか。どんな観光開発をやつ
ても、聖地としてのポジショニン
グを間違つてしまうと、ほかの観
光施設と同じような環境になつて
しまいます。一步境内に踏み入つ
たところから空気が変わる、その
空気に触れてみたいと感じる、そ
んな場所でありたいと私は思ひま
す。同時にこの時代でありますか
ら、この時代の最先端の空気を持
ち、決して神社は古い場所ではな
く、そこからこの時代に情報発信
をし、多くの人たちとの距離感を
詰めることが大切です。世界中の
人たちが本場に大切な場所だと感
じ、大切に残していこうと思う場
所になればと考へます。もう一
つ最後に言わせて頂きますと、私
どものいちばんの強みは時間スパン
の長さです。焦らずに本物の良

いものを宗像地区には残して頂
きたい、つくつて頂きたい、そして
発信して頂きたいと思ひます。

葦津

神社は記憶の塊です。過去のこ
とだけではなく、現在そして未来
に向けていろんなヒントがあるはず
です。それを導き出すのが我々神
職の役割だと思つています。今後
は、地域の方たちとともにいろん
なものを見つけ出し、皆様にお知
らせしていきたいと考へております。

豊田

皆様、長時間ご静聴有難うござ
いました。これにて終了いたします。

年次大会の
ものがたり

7月11日観光シンポジウム

カス瀬戸内へ

「ものがたり」観光の歴史を振り返るシンポジウムです。

シンポジウムの趣意・申し込み方法

シンポジウムプログラム

集積時間と船内見学プログラム

会場 WTCホール

日時 4月17日(土)

13時30分～16時30分

2010

観光を核にしたニッポンの地域再生

旅すれば 観光学習都市

ものがたり観光シンポジウム

in 河内長野

日時 6月27日(土) [午後1時～4時]

会場 ラブリーホール [河内長野市立文化会館]

開場 12:30

河内長野市で奏えるニッポンの観光

2009

広域観光シンポジウム

第3回年次大会(第3回)

大会および総会 10.19(日)

広域観光シンポジウム 10.20(日)

若者はなぜ旅をしなくなったのか

2013

ものがたり観光行動学会第2回年次大会

宗・教と観光

10月13日(土)

http://anata.org

前夜祭 寺子屋トーク

10月12日(金) 18:00～20:00

会場 恩賜家 内田 樹史

2012

ものがたり観光行動学会 第1回年次大会

日本観光の復興

いま…だからニッポンを歩きたい

10.15(土)

年次大会 9:45～17:40 総会 18:00～19:45

関西国際大学 尼崎キャンパス

2011

2016年 ものがたり観光行動学会 第6回年次大会 九州広域観光シンポジウム

普段使いのローカル線 「沿線の日常」が注目される観光の時代

会場 大分銀行 宗麟館2F

11.19(日)

12:00 開会式

13:00 シンポジウム

14:00 ショップタイム

11/20(月) 昼食・エンターステーション

2016

世界遺産の登録と観光地域づくりに向けて

九州のものがたり

10.11(日)

会場 福岡西門学院大学

参加費 大人1,100円

10月11日(日) 10:00開場

2015

ものがたり観光行動学会 第4回年次大会(第5回総会)

ロードムービー

10月12日(日)

東京都撮影所「試写室」

2014

TAMANOI Kouji
玉ノ井浩司

豊後大野市建設課 主幹

協働のまちづくり “ぶんごおおの未来カフェ”

——「次の世代につなぐ」まちづくり——



大分県における豊後大野市位置図

づくり活動を推進するネットワーク形成（仲間づくり）を目的として、平成26年に立ち上げられた。堅苦しいイメージの会議ではなく、お茶を飲みながら世代や立場を超えて気軽に話し合える場、その中で、まちの魅力や課題を共有し、互いの考えの違いに気づき、

1. はじめに

豊後大野市は平成17年3月に大野郡5町2村の合併により発足した市で、中心部となる旧三重町は大分市から南へ約35kmの場所にある。JR豊肥本線（大分駅〜熊本駅）が東西に通り、市内の駅は6駅、うち2駅（三重町駅および緒方駅）には観光スポットを巡る九州横断特急（別府駅〜熊本駅〜人吉駅）も停車する。三重町駅より南西側には商業・業務地、市役所など行政の中心的機能などが集積し、その周辺に住宅市街地が形成されている。また国道326号・県道三重新殿線などの幹線道路に近接することから駅前の自動車通行量は多く、大分市内方面への通勤通学者、飲食・買い物など歩行者も多い。このことから駅周辺は交通

ハブとしての都市機能を有するとともに、観光・情報発信の拠点づくりなど、豊後大野市の玄関口に相応しいまちづくりが望まれている。その実現に向けては、そこに暮らす人々をはじめ、交通機関を日々利用する人々、市外から訪れる人々など、広く市民の皆さんが係わり、主体的に考え、活動し続ける仕組みづくりが重要である。

2. 体験型まちづくり会議「ぶんごおおの未来カフェ」の発足

ぶんごおおの未来カフェは市民が協働して、豊後大野市の顔・玄関口ともいえるJR三重町駅周辺のまちの課題を洗い出し、解決策またはあるべき姿を検討・提案し、実践を試みるとともに、まち



ワークショップの様子 その2



ワークショップの様子 その1

知恵を出し合い・学び合うことを大切にしながら活動を展開してきた。構成は高校生から80代まで幅広い年齢層、様々な職業の方（学生、会社員、自営業、町内会、PTA、NPO等）に加え、市職員、県職員もファシリテーターとして参加。およそ80名の世代も職業も違う参加者で平成26年10月から平成28年2月まで、社会実験を含めて全13回に渡り活動を行ってきた。

3. 中間発表会の開催

（平成27年5月10日）

第1回は三重町駅周辺の魅力と課題を探るまち歩きで始まり、第2回には豊後大野市全体の魅力と課題を探るワーク。そして第3回、4回で『したいこと』『できること』を考えながら、まちづくりコンセプトをまとめた。そして5回目にあたる中間発表会で、これまでのワークの成果であるコンセプトを10班が発表し、それぞれのまちづくりの想いを共有した。続いて「協働と共生の地域づくり」と題して高知工科大学渡邊法美教授による基調講演。自身の物部川を守る取り組みを例に上げ、「地域づくりとは、地域が好きという感情を持って行動し、お互い

学びあい様々なことを共有しあうことである。持続する地域づくり活動のためには、子どもたちに地域を守る心を育てて行くことが、おとなの責任である」と語られた。そして市長、渡邊教授、里の旅公社の李氏、未来カフェの宮崎氏、野尻氏参加によるパネルディスカッション。「まちを知ること、まちに対する愛情が生まれる」「豊後大野市の魅力を子どもたちに伝えること、第1歩を踏み出す勇氣を持つこと、コケることがを恐れないことが大事」「まちづくりの活動が長続きするためには経済が回ることも大切なので仕組みづくりを視野にいれておくことや若者も巻き込んで行くために情報開示が必要」「人づくり・つながりづくりを通じて諦めていたことが一つでも実現出来れば、また次の活動につながるし、次の世代にもつながる」といった意見が出された。

4. 社会実験の開催

（平成27年11月29日）

これまでの未来カフェで三重町駅周辺の魅力活用・課題解決策を考えてきた検討結果をふまえ、駅周辺・駅前通り・農協跡地周辺・市場通り商店街・市役所周辺の5

つのエリアにて、まちを元気にする試験的な取り組みを行った。駅横広場で夜神楽と焼き鳥やおでんの出店。歩行者天国にした駅前通りには三重総合高校アンテナショップや通りの飲食店の協力によるまちなかランチ。農協跡地+三重温泉で温泉のパネル展示、足湯、スチールパン演奏や落語等。市場通りでは市内4蔵地酒の試飲会や文化財の建物で茶屋等。市役所前の駐車場では新米の試食と販売等。

来場者にまちに新たな気づきを感じてもらおう。これからのまちづくりに、いろいろなきっかけが生まれることを期待しての開催であった。当日は大勢の方にご来場頂き、たくさん笑顔で溢れ概ね成功と言えるものであった。来場者よりとったアンケートの分析では、概ね満足という意見が7割を占め「この企画を続けて欲しい」と今後に期待した意見が多く見受けられた。一方やや不満という意見ではエリアの広さを指摘する声や商品が早々に完売し飲食出来なかった、もっと子どもの遊ぶ内容の充実を、等の意見があった。未来カフェ参加者からは、市民が主体となって活動する過程において人と人のつながりが醸成でき、地域資源を再発見することが



コンセプト発表の様子



パネルディスカッションの様子



渡邊先生の基調講演の様子

出来た、飲食店以外の商店も巻き込み商店街との関係をもっと深めたい、等々の意見が出された。この社会実験により、新たなつながり・関わり合いが生まれ、まちが変わって行くきっかけが生まれたのではないかと考える。

5. ぶんごおの

未来まちづくり構想

く三重町駅周辺を考える

13回のワークショップをはじめ、まち歩き調査、グループ別活動、中間発表会／シンポジウム、更には、社会実験を通じて自ら提案する企画・アイデアの実現可能性を確かめるなど、約一年半にわたり、粘り強く検討を重ねてきた成果を「ハード」と「ソフト」、そして、『仲間やつながり』を意味する「ハート」という、3つの面からとりまとめ、「まちづくり構想」として市長へ提案した。

以下、主だった提案を挙げると、ハード面では、駅前広場・駐車場の整備、駅自由通路、駅前通りを含む周辺アクセス道路整備、公園整備（農協跡地）、バス停やタクシーの環境改善。ソフト面では、観光案内、イベントの企画・運営する母体、子どもを中心にした催し、空き店舗の活用、歩行者

天国、駅前商店街通りの組織化、マップの作成、景観の統一化。ハード面では、商店の方への精神的支援・連携、空き店舗所有者との連携、マルミヤストアとの連携、地域住民の理解、まちづくりの意見を聞く場などが挙げられる。

6. 駅周辺の課題解消へ向けて

ぶんごおの未来まちづくり構想を受け、改めてここに駅周辺の課題をまとめてみる。

駅周辺の課題

- ① 駅前広場が狭小であり接続道路も狭く見通しの悪いL字形形状で危険性が高い。
- ② 駅から離れた位置にバス停があり、交通の結節点として機能していない。
- ③ 現在、駅北側から三重町駅へのアクセスが出来ない。また、駅近くの県道三重新殿線に踏切がありホームに列車停車中は開かずの踏切となり列車に乗り遅れることから、駅北側からのアクセスを求める声が多い。
- ④ 鉄道による南北分断を解消するため、自由通路の設置が望まれている。



ぶんごおおの未来まちづくり構想の1ページ



社会実験の様子

- 過去、三重町駅周辺の再開発については商工会が主体となって考えられたことがあるが、諸事情により実現には至らなかった。今回、ぶんごおおの未来まちづくり構想により提案された駅周辺の整備は、未来カフェで市民らが体験した結果から出た「答え」であり、市民の素直な「意見」であることに価値があると考ええる。またこの課題を解消することで、つぎに列挙するような効果が期待される。
- ①自由通路設置による駅北側からの利便性の向上を図るとともに、新たな投資機会を誘発、南北一体化による相乗効果など、土地利用の高度化・効率化が期待される。
 - ②駅前広場整備により、分散しているバス・タクシー乗降所を集約・整理、運行ダイヤの最適化によるバスの増便や観光タクシーの本格的運行など、市の玄関口に相応しい交通結節点機能の強化が図られ、公共交通利用の促進につながる。
 - ③未来カフェの官民協働による「まちづくり活動」の継続展開により、地域への愛着・互恵性を醸成するとともに、スポーツツーリズムの展開等による滞在人口増加など、地域の活力・経済の活性化を促進し持続可能な地域経営の基盤づくりが促進される。
- そして今年度は、市民の活動と意見の実現に向け、自由通路・駅前広場・周辺道路等整備、PPP／PFIの導入可能性や整備効果を考慮した基本設計を作成のため、未来カフェ第2章（全9回の活動を予定）を展開中である。

YAMANAKA Shikatsugu

山中鹿次

NPO法人近畿地域活性ネットワーク

ポスト熊本地震と マラソン大会と観光振興

—— 豊肥本線沿線を中心として ——

Post-Kumamoto earthquake and marathon meet and sightseeing
promotion—Mainly on the vicinity of Hohi Line

要約

2016年4月14から16日に
かけて熊本県下で震度7の強い揺
れを生じさせた熊本地震は、本震
の後も余震が長引き、大分県中部
まで余震が拡がり、熊本・大分両
県の観光に大きな打撃を与えた。
大分から熊本にかけて走る豊肥
本線の観光振興の一環として、マ
ラソン大会の活用を提言するもの
である。

1 はじめに

古くから九州はマラソン、駅伝
が盛んで、その基盤の上で近年、
地域の観光活性のマラソン大会が
次々と登場している。1万人以上
の参加のあるフルマラソン大会だ
けでも2012年に熊本城マラ
ソン、2013年にさが桜マラ
ソン、2014年に北九州マラ
ソン、福岡マラソン。2016
年には鹿児島マラソンが新設され
ている。

九州観光推進機構の方でも、
「マラソン—九州」という専門
サイト (www.Marathon-kyushu.com) も開設している。

以上のように九州地方ではス
ポーツリズムとして、マラソ
ン大会は重要な地位を占めてい
る。熊本地震での観光の落ち込み



写真2 第22回おがた五千石マラソン大会の要項



写真1 原尻の滝をスタートするハーフマラソンの部

回復とさらなる飛躍を考えた場合、マラソン大会は重要な役割を担えることが期待できる。

2 豊後大野市 おがた五千石マラソンの現状と課題

ものがたり観光行動学会の専務理事が、同じく専務理事を務める「一般社団法人ぶんど大野里の旅公社」のある豊後大野市では、日本の滝百選に選ばれている原尻の滝をスタート・ゴールにして、おがた五千石マラソンが開催されている（写真1）。

ランニング雑誌で参加案内の出る大会は、今日1500前後あるが、滝の側、しかも日本の滝百選に選ばれている滝の側をスタートとゴールとする大会は、他に例を見ない貴重な大会である。

それだけにより多くの参加者を集める可能性を秘めている。この大会の現状と課題を考えていきたい。従来この大会は勤労感謝の日に開催していたが、21回大会から11月後半の日曜開催に変わり、2016年は11月27日開催である（写真2）。

今大会では熊本地震を受けて、大会参加費から100円ずつを「熊本・大分地震の被災地」へ寄付することになっている。

マラソン大会の参加費をチャリティに充てることは、1995年の阪神淡路大震災の後、被災地の兵庫県西宮市で開催の西宮国際ハーフマラソンが、地震発生から8カ月後の開催で、参加費の一部をチャリティに充てるなど、被災地、あるいは全国各地のマラソン大会で、広く実施されるようになっていく。

そのため、おがた五千石マラソンで、参加費の一部を被災地の復興支援に充てることは極めて適切な対応と言える。

20回大会から申し込み開始時期を早めたり、遠方からも参加しやすい日曜開催にするなどの見直しのせいか、それ以前の500人程度の参加者から、20回大会が579人、21回大会が646人とじりじり参加者が増加している。

しかし、原尻の滝のような絶景と紅葉の見ごろなど絶景のコースと、やはり千人を超える参加者が集まる改善が必要である。それには交通アクセスの改善が必要である。

JR豊肥本線での最寄駅の緒方駅からは、原尻の滝までレース会場に向かう路線バスが受付に間に合う時間には走っていない。そして歩けば3kmほどあり、自動車利

用にならざるを得ない。多くの参加者が集まるとなると原尻の滝辺の駐車場では収容できなくなるし、受付時間に間に合う列車ダイヤに合わせた臨時送迎バスの運行を是非実施することを提言したい。

3 熊本地震被災地の熊本県下のマラソン大会の開催状況と観光への影響

阿蘇市では、6月4日土曜日開催予定だった阿蘇カルデラスーパーマラソンは、地震発生直後に中止が決定したものの、それ以後の大会は2016年8月末現在ほぼ通常どおり開催されている。

7月9日には熊本地震復興支援と銘打ち、阿蘇市で阿蘇クロスカントリー駅伝・ハーフマラソン大会が開催され、次いで8月21日には南小国町で阿蘇瀬の本高原マラソンが開催された。

そして地震で大きな被害を受けた熊本城の城内にゴールする、熊本城マラソンが例年どおり2月第3日曜の19日に開催が決定した(写真3)。

阿蘇市では阿蘇神社が大きな被害を受け、熊本城の大きな被害を受けたニュースが頻繁にテレビ報道、新聞などで報じられている。にも関わらず、阿蘇や熊本城を

コースとして大会が開催されることの意義は大きい。

大会を開催することで、大会開催での宿泊など観光消費以外に、コースとなる道路の復旧が進みつつある印象、旅館やホテルの受け入れ体制には問題ないという印象を実際の参加者に強く与えることの出来ることと、大会の主催者には自治体に加わっているため、現地への観光訪問を自粛するのではなく、どしどし訪れてほしいという熱意を強く伝えることができる。

一般に市民ランナーは中高年の比率が高いため、職場などでランナー以外にも熊本を訪れた話などにより、口コミ効果が期待できる。

さらに大会開催により、参加費の一部をチャリティに充てる以外にも、会場での募金箱設置や、大会会場での特産品販売などでも、売上の一部をチャリティに充てるなど、復興支援にもより協力することが可能である。

観光振興と震災復興に拍車をかけるため、マラソン大会の開催を自粛するのではなく、熊本城マラソンを来年開催することは、災害復興や観光、社会貢献を充実させる方策として、良い事例となるのではなからうか。

4 豊肥本線沿線のマラソン大会連携の提言

大分県内にも及んだ熊本地震の揺れと被害は、両県の観光へ多大な影響を与えた。しかしマラソン大会の開催が観光に有効で、交通規制の対応からできるだけ公共交通での参加が増えることも望ましい。そのため以下のような対応を提言したい。

①熊本、大分両県の大会は共にJRの最寄駅からのバスを運行。

②大会同士の連携。豊後大野市であれば、おがた五千石マラソンの開催時には同市三重町で開催の3月後半の三重町さくらロードレースの大会要項を配布する。それを手始めに「九州の真ん中を走る」をキーワードにして、豊後竹田市の3月開催の名水マラソンなどとスタンプラリー、熊本県の豊肥本線沿いのマラソン大会でも連携を強めていく。

③両県にまたがる大会の連携。「九州真ん中豊肥本線沿線走る」のような形でのリーフレット作成、スタンプラリーもその範囲でエリアを策定。

④トレイルランニングへの対応。大会に限らず、最近では山道を走



写真3 熊本城マラソンのホームページより

るトレイルランニングが盛んになっていく。ジオパークや湧水、途中に温泉に入れるコース設定が豊肥本線沿線では容易である。大会だけに限らず、豊肥本線沿線が走ることと観光を兼ねた訪問が増えることへの誘導を図るべきである。

豊肥本線沿線は良質の農産物にも恵まれ、大会参加やトレイルランニングとともに、観光とともに農産品購入を兼ねての来訪も期待できる地域でもあり、マラソン大会開催場所と道の駅が近接したおがた五千石マラソンは、今後ますますの参加者が増える可能性があるのではなかろうか。

注：参考文献

- 1) 熊本：大分のマラソン大会情報に関しては「マラソン IN 九州 (www.marathon-kyushu.com)」を参照。ほか開催自治体の大会開催告知を参照した。
- 2) 山中鹿次 (1996) 「阪神：淡路大震災のランニングに与えた影響」、第47回日本体育学会大会号、日本体育学会、156ページ
- 3) 山中鹿次 (1998) 「ランニングと社会貢献」ランニング学研究10号、ランニング学会、63～67ページ

IMANISHI Mamoru

今西 衛

日本文理大学経営経済学部 准教授

MASUDA Yoshihiro

舛田 佳弘

日本文理大学経営経済学部 准教授

鉄道沿線の日常から 見えてくる地域の魅力

—— 学生の視点で見るぶんど大野里の旅 ——

1. はじめに

日本文理大学は、文部科学省「地（知）の拠点整備事業（大学COC事業）」に2014年度に選定された。COCとはCenter Of Communityの略で、大学が自治体を中心に地域社会と連携し、全学的に地域を志向した教育・研究・社会貢献を進める「地域のための大学」として全学的な教育カリキュラム・教育組織の改革を推進する事業である。このCOC事業において柱となるのは地方創生を担う人材の育成であり、これまでの大学教育のあり方を根本から見直し、学生達が大学での学びを通して地域の課題等の認識を深め、解決に向けて主体的に行動できる人材を輩出することを目指している。

本学の取り組みは、建学の精神である「産学一致」に「人間の育成」「社会・地域貢献」を加えた教育理念に基づき実績を上げてきた産業界・地域社会を意識した実践活動を主体とした全学での人間力教育を、地域課題である少子高齢社会を乗り切るために必要な豊かな心と専門的課題解決力を兼ね備える「地域創生人材」育成へと発展させ、これを地域との実践的協働活動により実現する事業である。

具体的には大分県内の少子高齢化が深刻である地域を対象に、「体験交流活動」＋「課題解決に必要な知識の修得」＋「ステークホルダーとの協働による課題解決型学修」を可能とする教育カリキュラム体系への全学的な再編等を通じて地（知）の拠点改革を実現し、地域力の向上につなげるものである。

本大会での学生発表もその取り組みの一つであり、フィールドである豊後大野市とは、2014年2月に包括連携協定を締結し、産業振興や地域活性化、人材育成における諸課題に取り組んでいる。また、「一般社団法人ぶんど大野里の旅公社」とは本年3月に連携協力協定を締結し、経営経済学部において、先行き不透明なことからこの時代を見据え、地方創生時代の新たな地域経営に資する観光のあり方を習得し実践できる人材の育成を目指した取り組みを公社と協働して行っている。

本大会では、今夏に行った学生達の取り組み、すなわち、JR豊後本線の豊後大野市区間を中心に、このローカル線沿線の日常を題材に、この地域を学生が自らの感性に従って小さな旅をし、観光資源としての地域の魅力を学生目線で見つめ、その魅力を発信する

る。本稿においては、そのベースとなっている教育プログラムや学活動のエッセンスについて解説する。

2. 活動フィールドである豊後大野市と本取り組みの関わり

大分県は「日本一のおんせん県おおいた」を標榜しており、日本でも有数の温泉地であり観光資源に恵まれている。しかし、その大分県にあって豊後大野市は温泉がない自治体のひとつである。温泉がないため、観光産業はこれまで十分に確立されてこなかったが、第一次産業は、大分の野菜畑ぶんど大野とうとうほど盛んである（注1）。高齢化率は県の人口推計によると2015年10月現在で40・9%（注2）と非常に高く（県内市町村で第3位）、このまま少子高齢化が続けば、地域の維持が困難になることが危惧される。

一方で、豊後大野市には、ジオパークなどの地域資源や、江戸時代から明治時代に作られた石橋などの歴史的建造物、神楽といった伝統文化などが数多く存在する。また、大分、宮崎両県にまたがる祖母・傾・大崩山系一帯が2016年8月に「ユネスコエコ

パーク」の国内推薦に決まる（注3）など、自然と調和した生活が残っている。しかしながら、これらが広く顕在化されておらず、また有機的につながっていないことから有効な地域観光資源として生かし切れていない。そこで、これらの現代的な価値をあらためて見つけ直し、新たな観光産業の創出を図り、地域の活性化を行うことで、自然と調和した持続可能な社会を作る必要に迫られている。

また、観光の活性化においてアクセス手段は重要であるが、豊後大野市には熊本市と大分市を結ぶJR豊肥本線が通っており、「九州横断特急」や「ななつ星 in 九州」が走るなど、九州周遊観光としての重要な路線を有している。さらに、豊後大野市には朝地、緒方、豊後清川、三重町、菅尾、犬飼の6つの駅があり、「九州横断特急」が停車する駅が2駅（緒方、三重町）も存在する。

以上のように豊後大野市には、観光の視点から見ると磨き切れていない魅力や生かし切れていない資源があるように思われる。そこで、観光客誘致の機運が高まる中、日本文理大学経営経済学部では2015年度から一般社団法人ぶんど大野里の旅公社と連携して、豊後大野市をフィールドとし

て観光を切り口とした新たな「コミュニティビジネス」(地域の課題を地域の住民が主体的にビジネスの手法を用いて解決する取り組み)の方策を探る活動を行っている。昨年2015年度は、豊後大野市の名所を訪問し、現状や課題を洗い出すこと、豊後大野市にどのような魅力があるのか発見し、地域の可能性を探った。その成果として、おすすめ観光ツアープランを学生達が作成し、2016年2月に豊後大野市民を対象としたCOC事業成果報告会にて、観光客誘客のための手法を提案した。

取り組み2年目となる本年度の開始早々の2016年4月に発生した熊本地震により、JR豊肥本線は大打撃を受け、九州周遊観光にも大きな影響を与えた。9月時点において今なお「肥後大津く阿蘇間」は不通であり、九州観光の要である熊本と大分とが鉄道で結ばれていない状況は、熊本、大分両県にとどまらず、九州広域観光に対して非常に深刻な影響を与えている。

一方で、このような状況であるが故に、JR豊肥本線の大分県側の価値をあらためて見直す機会でもあると思われる。このような背景から、2016年度は、顕在化されていないJR豊肥本線の

分県側沿線の観光価値について学生目線で再検証、再認識することで、豊後大野市の地域活性化、JR豊肥本線の活性化につなげていくことをねらいとすることとした。

3. 学生活動の概要

本取り組みの対象は、日本文理大学経営経済学部経営経済学科の1、2年生であり、今年度は1年生28名、2年生12名の合計40名が受講している。

まず、2年生を対象として、昨年度の活動で気づいた課題をまとめて探るため、6月にJR豊肥本線に乗って豊後大野の視察を行った。その後、8月上旬に、一般社団法人ぶんど大野里の旅公社専務理事の李有師氏をお招きして、これからの観光のあり方、豊後大野の現状、JR豊肥本線を旅する上でのポイント等について3コマの講義を行った。この事前講義は、学生達へ新しい観光への動機付けになると同時に、現地での主体的な学びの実践に向けた期待を高める効果をもたらしている。その上で、この一般社団法人が直営する「コミュニティビジネスの実践施設「ロジきよかわ」に宿泊した。

実施日は8月29日から30日の2泊

3日で、JR豊肥本線沿線の魅力を動画に納め、それを編集し、最終日に発表する全行程とした。

合宿では受講生40名を1チーム5人で8つのグループに分け、JR豊肥本線の犬飼、三重町、豊後清川、緒方、朝地、豊後竹田の各駅周辺の魅力と、JR豊肥本線(大分く宮地)の車窓の魅力(2チーム)をそれぞれの感性で発掘してもらった。初日と2日目の2日間の視察日設けることで、前日に絞り込んだポイントを再度訪問し、完成度の高い動画を作成するための撮影を行った。このとき、技術としてのクオリティにはこだわらず、学生自身の感性、視点を突き詰めることで完成度を高めてもらった。

その後、各チームでベースとなるストーリーの作成ののち、編集作業、プレゼン準備を行い、最終日に動画上映とこれらの発表を行い、聴衆への共感、ストーリー性の高まりを各チームで競った。その後、これら8チームの発表内容を学生達があらたにつなぎ直し、JR豊肥本線のスケール感、学生目線により発見した地域の魅力を1本の発表動画として再編集し、今回のシンポジウムの研究発表につなげている。

4. 各チームの活動目的

2日間の視察を行うにあたって、各チームは担当地域の実情に即して、個別の目的意識を持つ必要があった。李氏の事前のレクチャーをもとにした各チームの目標について、以下にその概略を述べる。

○犬飼チーム

かつて犬飼港のあった時代の町の面影とJR犬飼駅ができて以後の町との差はどこにあるであろうか。また、現在の町の中心エリアはどちらに向けて開かれているか、未来への可能性、その足掛かりはどこにあるのかを重点的に見てもらい、魅力の発掘を行う。

○三重町チーム

三重町には日本を代表する歴史的価値があるにもかかわらず、それが完全に埋没している。これを発掘できるか、歴女たちが好むものをみつけれられるかが、ポイントとなる。それゆえ、目的意識をもたなければ、素通りしてしまう魅力を探し出せるかが重要となる。

○豊後清川チーム

日本第一位と第二位の石橋がある。横浜出身の若者が作成したサイクルマップで実際にサイクルル

リップすることで、『楽しいサイクリング』となるかどうかを感じてもらおう。

○緒方チーム

東洋のナイアガラと呼ばれる原尻の滝があるにもかかわらず、観光客が十分に時間を消費しないのはなぜかという観点から視察する。実は、酒蔵、パワースポット感に満ちた神社（二宮八幡社）、美しい石橋（原尻橋）など絶景ポイントがあるにもかかわらず、道の駅の立ち寄り休憩型で20〜30分のワンストップ観光が絶対多数なのはなぜなのかを探索してもらうために、サイクリングしながら魅力発掘する。

○朝地チーム

朝地駅は、九州オルレ・奥豊後コースの起点となっているが、実は別の魅力が存在する。和歌山県に「たま駅長」で有名な駅があるが、実はこの駅と朝地駅周辺エリアは共通点やそれに勝る魅力があふれている。それを探し出せるかが鍵となっている。

○豊後竹田チーム

隣の竹田は古くは湯治、近年は観光として栄えている。岡藩の城下町にある豊後竹田駅から岡城

址まで歩いてもらうことで、岡城址はもろろんのこと、その道中の城下町としての雰囲気はどうにかに着目し、豊後大野に何が足りないのか、あるいは、豊後大野の方が優れている点を探ってもらおう。

○豊肥本線の車窓チーム（2チーム）九州を横断する豊肥本線について、熊本〜大分という意味の「豊肥」が九州圏外に理解されるのか、から議論してもらおう。その上で、九州横断特急が、九州を横断しつつ、沿線を活用しているかに焦点を当て、魅力発掘を行う。

5. 各チームによる魅力発見

○犬飼チーム

犬飼地区は年々人口が減少しており、商店街の店舗も閉店し続けている。一方で、「どんこ（ハゼ科の小魚）」や鮎が有名で、鮎の形を模した最中も販売されている。また、松山ケンイチ主演映画「デトロイト・メタル・シティ」（原作者である若杉公德氏（日本文理大学卒業）の出身地でもある）のロケ地でもある。

犬飼の観光資源として、犬飼石仏、波乗り地蔵などがある。特に、波乗り地蔵は、風化が激しく、探すのが難しかった（図1）

とのことで、スタンプラリー形式として、案内図を載せず、スポットを探し歩いてもらうのも新しい観光の形かもしれない。

○三重町チーム

三重町は、明治から昭和にかけて醤油や酒蔵が多く、歴史的な町並みの面影が残されている。また、神仏信仰も深く、商売繁盛の神様である江井須様あるいは恵比寿様を祀る西宮神社があり、交通の要でもあったことから、災難が起きないよう街道上に上(かさ)の地藏様、下(しも)の地藏様が祀られていたり、内山観音(図2)があったりする。

○豊後清川チーム

豊後清川駅周辺は、学生がサイクリングマップに沿って自転車に乗りながら、日本1位、2位のアーチ径を一望できる出会橋・轟橋(図3)などへと足を運んだ。この地区は道が非常に狭いが、起伏がそれほど大きくないため自転車での移動が便利である。また、車での移動では気付かなかった歴史的建造物が多くあることに気づいたとのことである。

○緒方チーム

緒方には東洋のナイアガラと呼

ばれる原尻の滝がある。一带は緒方平野が広がり、のどかな田園風景で水路が多い。また、平坦な道であるため女性のサイクリングにも最適である。サイクリングでしか楽しめない新しい緒方町の見方を探っていると、学生が宮崎駿監督作品「千と千尋の神隠し」の風景に似ていることに気付いた。そこで、学生自身が、千と千尋の神隠しの一場面を動画で再現(図4)するなど、新たな楽しみ方を見つけていた。

○朝地チーム

朝地は韓国済州島発祥のオルレの九州版である九州オルレ・豊後コースのスタート地点である。車では行くことができない地域に魅力ある資源が数多く存在する。しかも、スマートフォンナビゲーションも使えないため、紙の地図を使ったアナログな体験により、本来の到達目標にたどり着けなかったなど、別の意味で興味深く、貴重な体験ができた(図5、図6)。

○豊後竹田チーム

観光産業が盛んな竹田市と豊後大野市を比較することで、豊後大野の魅力が再認識したり、JR豊肥本線の魅力を再発見したりすることを目的として学生は竹田の城



図3 日本1位2位のアーチ径を持つ出会橋・轟橋(学生撮影)



図4 映画「千と千尋の神隠し」の再現(学生撮影)



図2 内山観音 学生から般若姫のスケールの大きさが分かる(学生撮影)

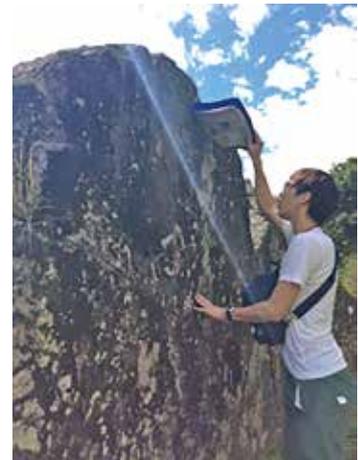


図1 波乗り地藏を捜索する学生(学生撮影)

下町を散策した。湧水(図7)や温泉が魅力的な要素である。特に水がおいしかったとのことで、この水が、田畑やお酒などにどのように使われているのか、商品化できるのかについて考える機会となった。

○豊肥本線の車窓Aチーム
(菅尾―宮地)

JRの車窓から豊後大野や阿蘇の風景を楽しむため、学生の1つのチームはJR菅尾駅からJR宮地駅まで、ローカル列車と九州横断特急を乗り継いだ。車窓から見ると、駅や駅周辺の雰囲気を感じることのであった。また、日豊本線を走っている、「ソニック」、「にちりんシーガイア」等と比べて、「九州横断特急」というネーミングは若者へのインパクトが薄いのではないかという意見も出された。

また、各駅の案内板が古いという意見も出された。特に、豊後清川駅の案内板は、豊後大野市になって10年が経過するにもかかわらず、依然として清川村のままになっている「ロジきよかわ」も「井崎キャンプ場」となっている(図8)。こうした案内板の定期的なメンテナンスも必要ではないだろうか。

○豊肥本線の車窓Bチーム
(大分―宮地)

もう一つのグループもまたJRの車窓から豊後大野や阿蘇の風景を楽しむため、JR大分駅からJR宮地駅まで、車窓から人と風景の変化を発見することに着目し、豊肥本線の利用者や観光客の利用の促進の手がかりとすることを目的にした。人の手が加わっているところは利用者も多く、人の手が加わっていない所は利用者も少ないのではないかと考え、学生が実際に乗車したところ、大分から宮地へ行くにつれて車窓の風景も変わっていることに気が付いた。大分市中心部は高層マンションが立ち並ぶが、次第に戸建て、大野川渓谷、田園地帯、森林、カルデラ(図9)と車窓の変遷を見ることが出来る。

こうした調査の結果、最初に設定した仮説は実際に乗車して正しかったと実感できたが、手を加えることが観光客にとって正しいのか疑問を持ったとのことである。そこで、観光資源はそのままに、観光客が利用しやすいようレンタサイクルや接続するバス、タクシーの連絡などソフトウェアの整備が必要であると考えた。



図5 素掘りトンネルと勘違いした普通のトンネルで撮影する学生たち(学生撮影)



図6 本来の目的地であった素掘りトンネル(市田秀樹日本理科大学COC特任准教授撮影)



図7 泉水湧水水源(学生撮影)



図8 清川村観光案内の看板(豊後清川駅)。ロジきよかわも井崎キャンプ場のまま放置されている(学生撮影)

6. おわりに

豊後大野市は、数万年前の阿蘇山の火砕流がもたらした地形が原尻の滝などのジオパークを形成し、自然とともに共生した生活がエコパークとして国内で推薦されるなど、自然に恵まれた土地柄である。加えて、神楽などの伝統文化も残っており、非常に興味深い地域である。にもかかわらず、あるいは、だからこそ、観光による町おこしをしてみなかつた経緯があるのだろう。しかし、少子高齢化にともなう働き手の減少は農業への依存を持続困難な状況へと変えつつあり、新たな産業基盤が期待されている。豊後大野に付加価

値をつけることは非常に重要なことであり、その要素は本稿では語り尽くされなかつたほど数多く存在する。

JR豊肥本線は、鉄道写真家の間ではたくさんの撮影スポットがあり、特に、初心者でも比較的撮りやすいポイントが多いとのことである。

2016年4月の熊本地震による影響は熊本のみならず、熊本を中心としてコースとなっていた九州周遊の観光にも大きな影響を与えた。九州観光の拠点である熊本と大分が鉄道で結ばれることが、熊本地震の復興に大きく貢献するといえよう。

同時に、利用者数の少ないJR豊肥本線の利用者数を増やすことも急務である。通勤通学の利用者の増加は見込めない以上、観光客の利用者を増やす必要がある。しかし、旧来のD&S（デザイン&ストーリー）列車では、列車の中でストーリーが完結しがちで、本稿で取り上げた観光地を訪れる動機が呼び起こされない。少子高齢社会やインバウンドツーリズムの到来によって、これからの観光も大きく変化しなくてはならない。駅を降りて、駅周辺を散策することで、その地域の滞在時間を増やし、地域の人とふれあうことこそ



図9 カルデラ大地が見えてくる（宮地駅周辺）（学生撮影）

が、地域活性化における既存のローカル線を使った観光であり、この観点がこれからの地域活性化や鉄道旅客の確保といった課題を解決するであろう。

本大会での学生発表は、若者である学生がJR豊肥本線沿線の旅を十分に楽しんだことを示すものであり、日常が溶け込むローカル線を使った楽しみがあることを示している。JR豊肥本線を中核として、このローカル線沿線の日常を題材とした新たな観光のあり方を学生と地域の方々が協働して作り上げることで、地域活性化に近づけていきたい。

なお、本学生発表で使用する動画については、大会後に日本文理大学COO事業ホームページの本大会特設サイト (<http://coo-nbu.jp/monogatari-kanko/>) で公開する。

謝辞

これらの授業設計、実施にあたっては、本学との間で包括連携協定を締結している、一般社団法人ぶんご大野里の旅公社専務理事の李有師氏をはじめとするスタッフの皆さま、日本文理大学COO事業推進責任者の吉村充功氏、COO特任准教授の市田秀樹氏に大変お世話になった。また、学生達がJR豊肥本線沿線を旅する中で多くの地域の方と関わりを持つことができた。ここに謝意を表します。

参考文献

- (注1) 『“大分の野菜畑” 知って ガレリア竹町にアンテナショップ』、大分合同新聞、2015年11月20日朝刊10面。
- (注2) 大分県、『第20表市町村の3区分別人口・人口割合及び人口指数』、大分県の人口推計【年報】平成27年版、2016年3月。
- (注3) 日本ユネスコ国内委員会『ユネスコエコパークへの推薦決定について』、文部科学省・農林水産省・環境省、<http://www.mext.go.jp/unesco/001/2016/1375562.htm>、2016年9月19日閲覧。



里の旅リゾート 「ロッジきよかわ」で 過ごした1年間

すでに「ロッジきよかわ開業記」は、昨年公開された本誌第5号に記しました。それから丸1年が経ちました。今回は、この1年間に新たに判明したことを、できる限り柔らかな筆致で記したいと思います。

1. 主張できる観光

「大分県といえば温泉！」——このことを「おんせん県おおいた」という表現に託し、県のトップ政策と位置づけながら、あらゆる手段を尽くして、いわば「地域セールス」として展開」していることは、遠く離れた大阪の人々も知っています。

不思議はありません。なにしろ大分県の知恵者は「シンクロスイミング」ならぬ、これをもじった「シンフロ（風呂＝温泉）」を編み出し、その実写？を観光客のあふれかえる大阪を代表する観光地・ミナミの道頓堀で演じるという、大方の虚を突く行動力で、大阪人を唸らせてくれたのですから……。

他方その大阪では、つい先ごろまで、どう鼻真目に見ても「実現困難」としか言いようのない「道頓堀で世界水泳大会を」と叫んでいた文化人や学者らが出て、その主張があまりにもしつこく、かつ長期にわたったために、誰もが呆れてしまっ、

LEE Yuuji

李 有 師

一般社団法人ぶんご大野里の旅公社 専務理事



(注1) グリコの看板もビックリ? 大分温泉おばちゃん川でひとつぶる
(「THE PAGE 大阪」2015年7月5日)

「そんな使い方、あかんやろ」という、本来なら実にまっとうな物言いが占め、シラケタ雰囲気の流れていました。

そんな大阪に大分県の「シンフロ」は、見事な「一石を投じる」格好になったわけです。言い換えると、それは「リアルと現実離れの対立したままの調和」——これぞ「シンフロ」と言いたくなりませぬ——の見事なお手本を示しました。同時に、少し見方を変えると、大阪観光の聖地である道頓堀という「場所」が「地域間交流」のみごとな「舞台」となりうることを満天下に示しましたのでした。

実際この「シンフロ」を報じたネット上の「THE PAGE 大阪」(注1)は「ヤフーニュース」にもリンクしたため、その検索数は膨大な数にのぼったようです。

なお、「おんせん県おおいた」で展開された「シンフロ」は本来「シンクロナイズドスイミング」の競技者が大分県の温泉中でシンクロを演じる」ことが中心となっていました。それに対して道頓堀で展開された「大阪バージョン」では「道頓堀を温泉に見立てて、そこで大阪のおばちゃんが『ひとつぶる浴びる』という仕掛けになっていました。つまり、「道頓堀が大分県の温泉に同化

する」

という点での「シンフロ」が成立していたことにもなります。

このような「道頓堀を舞台」に見立てた数々の試みは、地元商店主らが主体となって展開している日本各地とのネットワーク形成の過程で、さらに大輪の花を咲かせる可能性を帯び始めているようです。

こうした試みは、地域と地域が、ある場所の力を借りて情報発信する「地方の表現力(観光の産業化を真剣に考えている地域)」の勝利とっていいのかもしれない。ちなみに、江戸期の道頓堀はニューヨークのブロードウェイに勝るとも劣ることのない舞台芸術の町、つまりは劇場街だったわけです。ですから、この「シンフロ」は、そうした文脈を見事に活用したというほかなさそうです。

さて、そこで話は、わが「ロッキョキよかわ」が位置する豊後大野市に移ります。ご存じかどうか、この町は「おんせん県おおいた」に位置しながら、肝心の温泉がありません。まあ、仕方のないことです。でも、見方によっては、「県の観光政策の外側にある」というような疎外感に襲われるのも事実です。そんな現実のもと、



(注2) 旨いものがゴロゴロ
 (写真出所：「里の旅リゾート ロッジきよかわ」フェイスブック：2016年6月29日)

地元ブランド「豊後牛」を前にして、その豪華さ・大きさに驚く女性。手前と奥は「豊のしゃも」。野菜類もすべて地元食材でそろえ、これを炙って召し上がっていただきます。季節ものとして、原木シイタケや破竹の炙りも人気です。

「このまちならではのリアルな観光ビジネスを立ち上げよう」

と、2014年11月1日に設立された組織が「一般社団法人ぶんど大野里の旅公社」です。そのうえで、

「まず何よりも、これをノ」と考案されたのが、既存施設を改修した上で、公社みずから直営する里の旅リゾート「ロッジきよかわ」でした。

温泉がなく、その当然の結果として温泉宿の存在しない豊後大野は、そもそも「地域の魅力」と「泊まってもらう」を結びつけようとはせず、「人が泊まるのは温泉地だろう」という、ある意味では根拠のない諦念にとっぴり浸かってきました。

これは「あきらめの境地」なのでしょう。いや、長い歴史に恵まれた湯布院、別府、長湯など、有名で価値のある温泉と温泉宿がすぐ近くにあって、実際に繁盛しているわけです。ですから、むしろ「地政学的見地からの必然」が強い「諦念」なのかもしれません。

ところが他方、現代という時代は「否応なしのネット社会」の到来で、個性のある魅力的な宿泊施設の存在そのものが、実際に「それぞれの地域の観光ポータル」旅

人を招き入れる玄関口「ポータル」としての初動機能を果たすようになっています。これを逆の視点から眺めると、初めから宿泊客が誘致できないとあきらめてしまいうと、その地域の観光客誘致は永遠に不可能となってしまわざるをえません。

さあ、そこで、ひと昔まえの「ニッポンの観光」について考えてみます。それは、たとえば大阪なら、「観光」は金属工業や繊維工業などの基幹産業に付属する「付け足しの商売」であって、「ちょっと大阪城を見てもらう」ことにしか過ぎませんでした。それが温泉地の場合なら、企業はじめ各種団体の「欲情に奉仕する慰安旅行」だったともいえるでしょう。

こうした観光や旅行にあっては、「どこに泊まるか」「泊まったか」は「二の次」だと見なされがちでした。ところが今日、観光が立派な産業として自立するようになった現代、訪れたり滞在したりする地域が提供することのできる観光そのものの質感とその中身が問われることになり、「どこに泊まるか」「泊まったか」が一大事となったのです。

その地域ごとの「主張できる観光」がブランドを育て、地場の農

産品販売とも一対になる。善し悪しの好みがあるにしても、主張できる観光の「磁場」が人を引き寄せ、人口減抑止のキッカケにもなる。観光の産業化とはそのような総体のように感じられます。

2. 「里の旅」という

コンセプトとロジック経営

さて、「おんせん県おいた」というコンセプトには強力なインパクトがあり、今や世界ブランドとなりつつあるともいえるのでしよう。しかし、そうしたコンセプトに抗うことなく、卑屈にもならず、「おんせん県おいた」にそつと寄り添えるようなコンセプトを考え出してみよう。こうした思いから、公社組織そのものの名称にもなっている「里の旅（商標登録済）」というネーミングが思いつかれました。そこには、ざつとつぎのような思いが込められています。

- ◆ 大分県は（温泉もいいが）たいへんな農業県で、旨いものがゴロゴロしている（注2）。
- ◆ 観光ビジターの「温泉入浴」という行動は「観光行動パターン」の過半を占めるものではない。
- ◆ 国や県の観光政策がさらに行き

届き、観光の産業化が進めば「温泉地や有名観光スポット」のほかに「その背景としての本物のニッポン」を体験し触れてみたいというニーズが飛躍的に高まる。

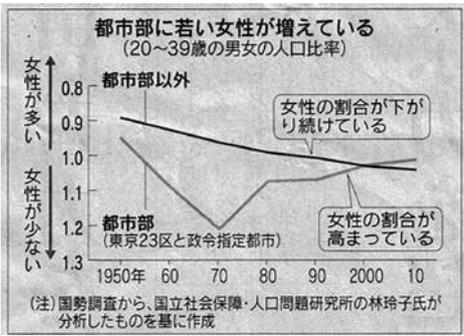
こうした傾向は、なにも外国人ビジターに限ったものではなく、当然のことながら日本人ビジターにも当てはまります。それを言い換えると、温泉旅館の建屋内の豪華さとは異質な、地域の環境や文化を直接肌身で感じとることのできる心象風景的な贅沢に対するニーズだといえます。より簡単には「その地域の風を肌で感じ取ることができる宿泊施設」とでもいうべきでしょう。

それに完全にぴったりと適合するというのはむつかしいでしょうが、こうした傾向に関連して、最近では「グランピング」という宿泊形態がブームを呼びつつあります。すでに高級志向の星野リゾートなども、その経営に乗り出しています。それは「高級な露営型宿泊施設」とでも表現すべきものですが、超高級宿を手掛けている経営主体が参与し始めると、どうしても値段が張りすぎて庶民には手が出ません。

それに対して、たまたまグラン

ピングというカテゴリーに近い宿泊形態を志向しているロジッキよかわは、適切な価格でその楽しさが享受できるものとなっています。ただし、すでにお分かりのように「高級感が漂う」というわけではなく、同時に星野リゾートとは比較にならない「庶民的／お手頃価格」の宿泊施設となつています。ただし、「地域の環境や文化を直接肌身で感じとれる贅沢」に関しては、そうした高級リゾートにも引けを取らないだろうと自負しています。

といいますのも、ここ豊後大野では、すでに認定済みの日本ジオパーク、認定に向けて活動中のユネスコエコパークなどを活用しながら、教育的効果をねらった観光誘導の試みが活発です。そしてロジッキよかわは、そうした市内に数多く存在する、価値の高いポイントや風光明媚な場所と直接・間接を問わず、さまざまなつながりを持ち、とりわけ地域自慢の食材とも深い契りを結んだ宿泊経営形態を採用しているのです。



(注3) 「日曜に考える」
 (『日本経済新聞』2016年7月17日) より

3. よそ者の境界

さて、地域おこしのキーマンについて、よく知られている表現に「よそ者、若者、大馬鹿者」という表現があります。むろん当を得ている面もありますが、厳密に言えば、これは精緻な表現ではなく、少々乱暴に過ぎるといべきでしょう。

たしかに「よそ者、若者、大馬鹿者」は、地域おこしの初動や始動には大きな役割を果たします。しかし、その営みにおける主体を継続的に作動し続けようとする、必ず壁にぶつかります。その壁にぶつかったとき、その地域における旧来の有形無形の「自己規制」から、地域おこしの営みを解き放つてくれる地域人の存在が重要となります。

ここでいう自己規制は、単に「守旧」という意味合いではありません。より広く、昔からごく自然に継承されてきた「在所のルール」のようなもので、古くて伝統のある地域であればあるほど、その適用は厳密です。これを継承して行こうとする力は、ごく自然に継承されてきたものだけに、大きな海のような力強さに裏打ちされています。

ところが残念なことに、実際にはそのルールの厳密さが、地域の

人口減少を速めている場合が少なくありません。多くの場合、そうしたルールはニッポンの人口増大期に増幅されてきたものが多く、現在の減少した人口のもとでは、いわば「やらなければならないこと」が多すぎるといわざるをえません。

その結果、かりに新たな人が地域に参入したとすると、そのルールの適用が、彼らに対しても無意識のうちに必要な以上の厳密さで課せられるといった事態が生じるのです。その結果、新規参入者、とりわけ「よそ者」にとっては「過剰な負担」だと感じられてしまうというわけです。

このことを象徴的に示す新聞記事に「日曜に考える」(『日本経済新聞』2016年7月17日)があります。その表題は「地方がおよびえる女性流出…因習が重荷、打破へ一歩」というものでした(注3)。また、この記事に付加されていたコラム「ネットをのぞくと」には、「若者につる田舎への不満」と題し、「(地方では)お年寄りが圧倒的に発言力を持つ」という、N T T コムオンラインに協力を得た調査ネタも紹介されていました。

さて、そこで里の旅リゾート「ロジッキよかわ」です。繰り返して述べてきたように、それは豊後大野市清川町に位置しています。

当然、このコラムに記されていることは、この地域にもあてはまりません。

背景には世界と日本で進行する「行きつくところまで行きついた経済合理性」のもたらした必然の結果なのかもしれません。

ただ、経済合理性に貫かれた社会における「田舎」と呼ばれる地域の「生きづらさ」を、いわば経済合理性を最優先させる立場を堅持しているはずの「ニッケイ」が記事として取り上げたことは、ある種の新鮮な驚きを感じさせてくれました。

まあ、そのことは置くとして、「田舎」というほかない場所における地域経営の困難さは、田舎と都市の情報バイアスが解消され、交通インフラが整備された現代社会では、より深刻な問題をはらんでいるような気がします。

つまり、便利になったと喜んでいた(小なる田舎)が、気づいてみると(大なる都市)に飲み込まれていたという「ストロー現象」なる表現があります。しかし、地方の生活を実際に長期にナマで体験してみると、状況はストローなんていうヤワなものでありません。地方のすべてが「経済合理性」という怪物IIブラックホール」に飲み込まれているようで、それは



地元の特産品「酒蒸し饅頭」、その「餡子無しバージョン」を「しえ饅頭」といいます。地元で毎日つくられている米麴の香りが特徴の微かに甘い、とても上品な「しえ饅頭」を朝食時「白いパン」としてお出ししています。外国ゲストにも、とても人気です（このお二人はドイツから）。「しえ饅頭のこんがり白パン」「地元のタマゴを使ったフワフワ・スクランブルの地元野菜添え」にミルクまたはオレンジジュース、コーヒーもついて600円（税別）の朝食です。

（注4）朝食は地元特産の酒蒸し饅頭／
（「里の旅リゾート ロッジきよかわ」フェイスブック（2016.6.11）より）

「バキューム現象」とでも表現すべき厳しさをはらんでいると強く感じるのです。

4. 初年度の実績と今後

里の旅リゾート「ロッジきよかわ」は、一般社団法人ぶんど大野里の旅公社の直営施設として通年型の営業を行っています。ただ、公社業務のすべてがロッジ経営にあるというわけではありません。公社業務は「豊後大野の魅力を体現できる旅や観光とは一体何か？」を、宿泊業を通じ、美辞麗句ではない利用者のナマの声を直接取得して、それら全般を「地域経営に活かす」ということを本来の狙いとしています。さて、1年目のロッジ経営で、利用者からのナマの声で最も強かったものは大きくは次の3点に集約できます。

- ① 地域のおいしい食材をシンプルでいいから求めやすく提供してほしい。
- ② 地域の香りが浮き立つ場所の提供を心掛けてほしい。
- ③ 移動の不安を感じさせない観光インフラを提供してほしい。

まず、①については、地域のかに実在する「美味」に対し、感度を研ぎ澄ます努力を注ぎ続けてきました。ただ、ネットワークが不足しているという感じは否めません。昼食や夕食処の案内力も、まだまだ不十分です。というのも、有名温泉旅館エリアに比べると、たしかに「観光っぽい雰囲気」には欠けますが、むしろ安くておいしい良心的なお店の多いことは自慢できるのに、そのことが訪問者に周知できていません。

ロッジ経営に関しては、産直販売の雄「道の駅きよかわ」がすぐそばにあるおかげで、たいへん救われています。朝食や夕食時には、極力地元産品を提供し、地域産品の購買動機へと導くことを心掛けています（注4）。

また、地域ブランド「豊のしゃも」や「豊後牛」の入荷に関しても、プロの声をモニターしながら工夫を重ねているところです。ただ、未だ行き届かない部分もあって、これからの課題も少なくありません。

ついで、②については、ロッジ経営エリアにおける課題の解決を除き、この公社が直接的な断を下すことはできません。しかし、日本ジオパークの認定を受けてい



(注5)

ロッジの中の「ほだ場（原木シイタケの畑）」
【「里の旅リゾート ロッジきよかわ」フェイスブック
(2016年3月8日)より】

安価に売られている大量生産のシイタケは、すぐ育つ菌床シイタケといいますが、旨みのある原木シイタケとは別物です。豊後大野は原木シイタケ（収穫まで約2年）の生産が盛んで、原木シイタケを使った「乾しシイタケ」の生産量は日本一クラスです（水気が多い菌床モノは「乾しシイタケ」になりません）。今年春、ロッジきよかわ内で「ほだ場」をつくりました。これはその第一歩、クヌギの木にシイタケ菌を植える「コマ打ち」です。ロッジでは、このような「風土や文化を感じる場づくり」を心掛けています。

豊後大野市の状況から、「教育財（地域や人を啓蒙し教育する公共財）」である「日本ジオパーク」と「観光商財（観光ビジネスを振興させる公共財）」である地域資源のマッチングが今後の課題だと思われまます。

ただ、ロッジ内においては、地域の自慢の食材である「原木シイタケ」（注5）の栽培などを心がけてもいます。

最後に、③については、公社設立の前後から多数の意見をもらってきました。その結果、現在では地域のタクシー会社の協力を得て「里の旅タクシー（商標登録済）」という商材を試み、その開発と展開を試みているところです。

この試みについては、すでに豊後大野市にある酒蔵（日本酒蔵2／焼酎蔵2）や市内5カ所の道の駅、また市内を東西に貫くJR豊肥本線6駅などの協力を得て、市内の知られざる観光スポットを結び回遊する「里の旅タクシー」の運行が始まっています。

しかし、その実績はまだまだ心もとない状況で、力不足の感は否めません。まだまだこれからです。と述べたところで、これまでの「ロッジきよかわ」そのものの営業実績を記しておきます。データ

は昨2015年7月25日における開業以後、本2016年3月末までのものです。

その後、4月に発生した熊本地震を契機に、豊後大野市への物理的被害はほぼ皆無であったにもかかわらず、風評被害による宿泊キャンセルが後を絶たなかった結果、本施設も営業的には大きなダメージを受けました。したがって、ここに挙げた数字は継続的、持続的なものを示すとは考えていません。実績的にいいとも、悪いとも、いえるものではないと考えています。

里の旅リゾート・

ロッジきよかわ営業実績

(2015年7月25日～)

2016年3月31日)

◆ 宿泊利用者数1089名（うち、地域素材を使用した食育体験者の数736名）

◆ BBQサイト等、日帰り利用者数531名（うち、地域素材を使用した食育体験者の数93名）

◆ 周知実績…平成27（2015）年3月期1カ月間の大手予約サイト・ビュー数130000件
備考…

豊後大野市という地域名称は、各種予約サイト上において、その存在の位置づけが希薄で、観

光上の地域名称として驚くほど認知度が低い。この検索数も便宜上「大分市エリア」の中で処理されている検索数。ただし、この時点で既に大分市エリア全宿泊施設中、検索件数第8位を示した。

5. 結びにかえて

日本において「観光」が産業的な意味を持つ事象として、大きく取り上げられるようになったのはつい最近のことです。私のふるさと大阪でも、前述したようについ先ごろで、観光といえば「地域の脈絡や文脈を無視しても集客すればいい」という文化人や学者がいたくらいです。当時は、その人たちが大阪の観光政策も担っていたように思います。わずか10年程前のことです。

一方、最近になって日本政府は、年間2千万人の外国人ビジターの数を近い将来「4千万人に」と言い始めています。数字的な伸びは喜ばしいことです。しかし、足下の町にそれなりの考えや、都市計画的な方面においての見識、行動力がなければ、「暮らし」というものが町から消え去ってしまう恐れがあります。

戦後、重厚長大産業が日本を

リードし、都市と農村の在り方や姿が極端に変化したのは、まだそう遠い昔の話ではありません。

では、農業地域としての風情と文化、風土と環境が今もなお守り育てられているこの町、豊後大野はどうでしょう？ 『毎日新聞』（大阪本社版）の旅欄の取材のために、たまたま私自身が初めて、豊後大野を訪ねたのは8年ほど前のことです。この時の人口は4万3千人ほどだったと記憶しています。今その人口は3万7千人台になりました。驚くようなスピードで人口減少が進んでいるのは、よそ者の目にも明らかです。

そのことを契機に、以後、毎年のように豊後大野にやってくるようになって、この町では農業に観光を絡めた「農光混在」の戦略が必要不可欠で、かつ地域に最もふさわしいと感じるようになりました。

限られたそれぞれの域内で、自己完結した地域経営ができた昭和は古き良き時代だったのでしょう。でも、けっして時計のネジは戻せません。あくまでも、自律的前進だけが、あらゆる地域の未来を開く鍵になるのだと思います。

TAKADA Masatoshi

高田公理

武庫川女子大学 名誉教授

旅先で土地ごとの嗜好品を楽しむ

ブルーマウンテンの
「コーヒーとたばこ」

こんな文章がある。コーヒーをめぐって、近代日本を代表する物理学者にして俳人・随筆家でもあった寺田寅彦が吉村冬彦の筆名で書いたものだ。

凡てのエキゾチックなものに憧憬をもつて居た子供心に此の南洋的西洋的な香気は未知の極楽郷から渡つてきた一脈の薫風のやうに感ぜられた〔珈琲哲学序説』『経済往来』1923年2月号〕。

よく似た経験が、私にもある。「バラ」を意味するスペイン語「カタリア」語だったのだろう、「ローサ」という名の喫茶店が京都の下町にあった。10歳年上の兄が、小学生だった私を、そこに連れていってくれた。分厚いコーヒー茶碗から立ちのぼる好い香り、初めて体験する苦味と甘みのかいたコーヒーの濃厚な味わいは忘れがたい。

以来、おびただしい量のコーヒーを飲んだ。しかし、あるときから「生クリーム」にかえて乳化した植物油を含む代用品の「コーヒーフレッシュ」を用いる店が増えた。それでコーヒーから距離を

置くようになった。

その後、何年を経たかの憶えはないが、カリブの島々に出かける機会に恵まれた。その際に訪れた場所のひとつにジャマイカのブルーマウンテンがある。

首都キングストンでレゲエ・ミュージシャン、ボブ・マーリーの家を見物した翌日、自動車で急斜面をのぼってUCCのコーヒー園を訪れた。今では、そのゲストハウスとして使われているクレイトン・ハウス——19世紀初頭、ジャマイカ総督だったイギリス人クレイトン卿の旧別邸——で、最高級のブルーマウンテンを飲んだ。

戸外のテラスの椅子に座る。緑豊かな山々は淡いブルーの空気に包まれているかのようにだ。風が快い。淹れたばかりのコーヒーをブラックのまま、口に含む。月並みだが、香りが高い。上品な苦味の底から、ほのかな甘みが舌に届く。うまいコーヒーは、やっぱりうまい。

たばこがほしくなる。バニラの香りの芳醇なブラックキャプテンの葉をつめたパイプをくゆらす。火皿から藍色の煙が立ちのぼる。日本からの長旅の疲れが遠のいていく。そんな気持良さにはしばし浸った。



図1 クレイトン・ハウス (撮影：筆者)

嗜好品で疲れと緊張を緩め、 ゆっくりくつろぐ

コーヒー、茶・紅茶、酒、たばこを「四大嗜好品」と呼ぶことがある。ここで「嗜好品」とは「栄養摂取を目的とせず、香味や刺激を得るための飲食物」（『広辞苑』）だとされる。ふつう生命維持に積極的な効果はない。

だから、なのか。茶・紅茶、コーヒーは別として、たばこや酒は「健康によくない」とする論調が盛んだ。

いや、コーヒーや紅茶も、覚醒作用のあるカフェインを含んでいる。そこで最近まで、アメリカなどでは健康によろしくないとと言われることが多かった。それで代わりにハーブティーを好んで飲むひとが増えたりした。ただ、最近はコーヒーが健康にいいという見解が広く流布するようになった。どうやら嗜好品には毀誉褒貶がついて回るのが珍しくないようだ。

べつだん困ることはない。健康によろしくないという評価が定まっても、栄養が不足する心配はないからだ。しかし、ないと寂しい。摂取すると、体はくつろぎ、心が和む。人と人との出会いや意思疎通を円滑にするといった利点もある。

嗜好品の多くは「無用の用」の

最たるものなのかもしれない。とくに多忙やストレスの多い現代社会で、それが果たす役割は小さなものではないように思われる。

ところで「嗜好品」という日本語は外国語になりにくい。和英辞典を引くと、favorite, article of luxury, pleasure productsなどの訳語が記されている。直訳すると、たんに「お気に入り」「贅沢品」「楽しみの品」ということになろう。ただ、ドイツ語には Genuss Mittel という言葉がある。それでも和訳すると「楽しみ的手段」となって、余りにも素っ気ない。そこには「嗜好品」という日本語の豊かな含蓄はない。

もっとも、日本語の「嗜好品」という言葉も、その歴史は必ずしも古くないようだ。その最も早い使用例のひとつは1912（大正元年）年、森鷗外の短編小説「藤棚」（『太陽』第18巻第9号）だとされる。それを参照してみると……。

葉は勿論の事、人生に必要な嗜好品に毒になることのある物は幾らもある。世間の恐怖はどうかするとその毒になることのある物を、根本から無くしてしまはうとして、必要な物まで遠ざけやうとするやうになる。要求が過大になる。出来ない相談になる。



図2 キンマの葉で包んだピンロウ
(出所：http://landlopers.com/2013/10/20/betel-nuts)

こうした物言いの背景には、当時の急速な「近代化」「都市化」の世相がある。新しい人間関係や社会組織が生まれ、人々は慣れない緊張を強いられた。そこで、人間の心身に微妙に作用して緊張を緩め、人と人の出会いを円滑にする酒やたばこ、コーヒーや茶・紅茶などへの要請が高まり始めたのだろう。それを鵠外は「嗜好品」という卓抜の造語で捉え直したのだ。

このことは、すでに触れたように多忙でストレスの多い現代社会にもあてはまる。のみならず、たとえ快く、楽しくはあっても、慣れない土地を訪れる旅には、一種の緊張や疲労が伴う。それを嗜好品は巧みに緩め、くつろがせてくれる。ジャマイカのブルーマウンテンでのコーヒーとパイプたばこに、そんなことを強く感じた。

台湾の村でピンロウを試みる

見知らぬ土地を訪れると、ときに未知の「嗜好品（のようなもの）」に出会うことがある。これも楽しい。

グアムに出かけたとき、舗装道路のあちこちに乾燥して赤茶けた「血痕」があった。何ごとかといぶかっていると、先住民のチャモ

ロの人なのだろう、日に焼けた中年男が突然、赤みがかった茶色っぽい液体を吐いた。まるで喀血のように見えたが、元気そうだ。

「なるほど、これがピンロウか」
ここでいうピンロウとは、ピンロウヤシの実に水で練った石灰を塗り、さらにキンマ（英語では「ベテル（betel）」）の葉で包んだものだ。ピンロウの実はアレコリンというアルカロイドを、コショウ科の植物キンマの葉は独特の香りのある精油を含んでいる。そして石灰のアルカリの作用がアレコリンの唾液への溶解を促すことで心身に軽い興奮性の酩酊をもたらすのだ。そのピンロウを噛む習慣は、東南アジアからインドまで、広い範囲に分布している。

私自身が体験したのは、友人が昔から繰り返し訪れている台湾の村に同行した際のことだった。川辺の屋敷の庭で、鶏を焼き火で焼きながらの酒宴が始まった。身は固いが、文字どおり放し飼いの鶏の肉は、塩をふりかけて直火で焼くだけで滋味に満ちている。

ビールと、少し甘みの強い清酒に似た米の酒の飲み心地も申し分ない。やがて腹がくちくちくなってきたころ、主人がピンロウを勧めてくれた。それを見よう見まねで口

に入れ、ひたすら嘔む。すると、大量の唾液が出て、いがらっぽいやような苦味が口中に広がった。

飲み込んではいけならしい。で、唾を吐く。それは血のような赤茶けた色をしていた。なおも嘔み続ける。すると脳髓に「かぁーっ」と熱感が伝わり、軽い興奮を伴った酩酊感がせりあがってくる。

「なるほど、これがピンロウなのか」酒の酔いもあって、その後、何を話したかは憶えていない。しかし、不思議な高揚感の快さだけは、旅の記憶の奥深いところに残っている。

このピンロウを商う屋台が台湾の、自動車の通る国道の随所で営業している。トラック運転手などが、ひよいと立ち寄って買っているらしい。

そんな屋台には、きまってセクシーな衣装に身を固めた若い女性がいて、「ピンロウ西施」と呼ばれている。西施とは、楊貴妃などと並ぶ中国四大美人の一人とされる人物だ。なんでも紀元前5世紀、春秋時代の末期に、越王勾践が呉王夫差を骨抜きにするためにプレゼントした美女なのだそう。結果、この策略は見事に成功し、呉は越に滅ぼされることになった。

私もピンロウ西施のいる屋台に

立ち寄ったことがある。余りに露出過剰な、その衣装には度肝を抜かれた。ただ、彼女らが性的サービスに身をまかすことはないという。昔の日本の「たばこ屋の看板娘」といったところであるらしい。

エチオピアでアラビアチャノキに出会う

今ひとつ、強い印象が残っているのは、アラビアチャノキの初体験だ。1993年にエリトリア領となるダナキル砂漠を、いまだエチオピア領だった1980年代に訪れる機会があった。

海拔マイナス15メートル——アフリカ大陸の「最低」標高に位置するアッサル湖（ジブチ領）を南東端に擁したダナキル砂漠は、平均気温が世界で最も高い場所でもある。そこには、一面に広がる塩原から塩を掘り出し、ラクダの背に乗せて運び出すことで生計を立てるアフアール族の人々が暮らしている。

ちょうど真夏の8月末、気温は摂氏50度に近かった。2リットルのペットボトル入りミネラルウォーターをのべつ飲み続けながら、あるテレビ番組の取材をした。終わると、汗をかきすぎたからか、なんだか体が少し、しぼん

だような気がした。

そのままジープに乗って高原をめざす。エチオピアの西半分には広がるアビシニア高原は、海拔2000メートル前後の土地だ。ダナキル砂漠とは、まるで異なる冷涼な気候が快い。

その高原の麓に取り付く前に、乗っていたジープが、何者かに狙撃された。

「ダーーン」という銃声が二発、聞こえた。その瞬間、ドライバーは、「アフアールノ」と叫んで速度をあげる。助手席のガイドは、ズボンのベルトにはさんでいたピストルを取り出して、にやりと笑う。



図3 ピンロウ西施のいるピンロウショップ遠景 (Wikipedia より)



図4 カート（アラビアチャノキ、出所：Wikipedia）

当時、アフアールの人々とエチオピア政府の間には、エリトリアの独立をめぐる深刻な軋轢があったのだ。

渴いていた口が一層、渴く。水を飲んだ。が、渴きはおさまらない。かなり走ったところで、ジープが止まった。一服しよう、というこららしい。私もたばこを吸った。しかし、一向にうまくない。それを察したのか、

「町に着いたら、チャットをやろう」とガイドが、ピストルを持って遊びながらつぶやく。

まもなく小さな町の入り口に辿り着いた。その路上に、緑の葉の繁る小枝を商う何人かのチャット売りの姿が見える。ガイドは、いくつもの小枝の束を矯めつ眇めつ一束を選んだ。

ジープに戻ると、その束から一枚ずつ葉をむしって口に入れ、くちやくちやくと噛む。私も真似をして、くちやくちやくと噛んでみた。青臭いが、気持の好い匂いが鼻孔に届き、苦味のある緑の葉の味が舌を刺激する。それをそのままミネラルウォーターと一緒に胃の腑に流し込む。すると、上まぶたに張りが出てくる感じがした。もやもやとした心身に、ある種の爽快感が満ちてきて、ささくれたった気分が落ち着きを取り戻すようでもある。美味とはいえないが、エチオピアの人々がチャットを好む理由が分かったような気がした。

この「チャット」——すでに触れたように和名を「アラビアチャノキ」というニシキギ科の植物だ。その葉を噛む習俗は、エチオピアの東側の紅海を渡ったアラビア半島の南西端に位置するイエメンでも盛んなのだそうだ。ただ、イエメンでは「カート」と呼ばれている。

イエメンは、アラブの源流を自負する、誇り高い人々の国だ。ここでは毎日、男たちが「カート・パー

テイ」に出かける。昼過ぎ、誰かの家が集まり、皆でカートの葉を噛み、水やコーラと共にその汁を飲むのだ。

やがて気分が落ち着いてくると、人々の間に「同じ時間を共有している」という不思議な感覚が広がる。そんな静謐の時間を共有することが、仕事を含めた日常の間関係を確かなものにするのだという。

イエメンは、経済的に豊かな国ではない。1人あたり国民総生産は（1992年）当時400ドル程度で、日本の100分の1以下だった。にもかかわらずカートの生産額が、農業生産の40%余を占めていた。のみならず、カートの流通が、この国の経済の根幹を支えていたのだそうだ。もっとも20世紀初頭の日本でも、国家予算の30%余が、酒税とたばこ税でまかなわれていた。そしてそれが日露戦争の戦費をまかなったのだ。嗜好品の経済的な役割はあなどれない。

イエメンの話は、知人から聞いた話だ。しかし、旅先で土地ごとの珍しい嗜好品に出会うのは非常に興味深い。それらは、旅の疲れと緊張を快く緩めてもくれる。

コーヒー儀礼、カヴァ、 塩と油、そしてダシ

これらのほか、エチオピアには余りにも有名なコーヒー儀礼がある。一度だけ、それに招待されたことがあるが、余り鮮明な印象を受けることはなかった。

それよりは太平洋諸島で広く行なわれているというカヴァの儀式は体験してみたいと思う。カヴァはコショウ科の植物で、その根を砕いて水に溶いて飲むらしい。ハワイを訪れた際、その粉末が「リラックスの妙薬」と称してサプリメントショップで売られていた。それを水に溶いて飲んだところ、確かに気分が落ち着くような気がした。

あるいは、カメルーンを中心とする西アフリカの「コーラの実」をかじる習俗——若い男女が近づきになるとき、この実を共にかじって心を通わすのだそうだ。日常感覚からすると、かなり高価な品らしい。しかし、その「高価」が、シャレではなくて「効果」を発揮するのだという。これには独特の清涼感があるようだ。

コーラといえは「コココーラ」——「ココ」は今日、ココインの原料として厳禁の麻薬扱いだ。しかし、昔のコカコーラには、コーラと共に南米のコカの成分が含まれていた。

その葉は今も、南米アンデスで「コカ茶」にして飲まれている。空気が薄く、寒さの厳しい土地では日常の活力を呼び起こす嗜好品にほかならないのだ。

日本では厳禁のマリファナ（大麻）やアヘンも、インド東部のベンガルでは、嗜好品の一種として常用されているようだ。インドの金持ちは、賭博に興じるとき、大麻の葉の生ジュースを飲んで、気を大きくするのだという話を耳にしたこともある。

さらに最近、大麻を嗜好品として使用することが許容される地域が急速に増えている。たとえばアメリカのコロラド州やワシントン州、スペイン、ウルグアイなどでは合法化された。そのほか「その吸引を犯罪として扱わない」国や地域にオランダ、ポルトガル、イギリス、ドイツ、チェコ、デンマーク、アルゼンチン、チリ、ジャマイカ、オーストラリアなどがある。近い将来、その範囲は大幅に広がると考えられる。

このように「嗜好品」という、きわめて小さな窓から世界を眺めてみると、そこにはきわめて広大な楽しみみの沃野の広がっていることが展望できるのだ。

と、ここまで書いてきて、ときに京都の北山を歩いた昔を思い出す。焚き火にくべた小枝で火をつ

けたたばこの一服目が絶妙のうまさだったのだ。木の枝がこげるときに出る煙の良い匂いが混じっていたからだと思う。

旅先でくつろぎ、 旅の記憶を反芻する

いずれにしろ旅の記憶の随所には、その時どきの印象を刻印する嗜好品との出会いがある。そんな旅のあと、長い時間を経て、それを反芻する。そんなときにも、コーヒーや茶・紅茶、たばこや酒が、その記憶を鮮明に想起させるきっかけになる場合も少なくない。

そういえば、この小文の冒頭に紹介した吉村冬彦の「珈琲哲学序説」には、こんな文章もあった。

（仕事が行き詰まったとき）
コーヒー碗の縁が正に唇と相触れやうとする瞬間にぱつと頭の中に一道の光が流れ込むやうな気がする。と同時に、やすやすと解決の手掛りを思付くことが屢々あるやうである。

人間の体と心に作用する嗜好品は、ときに脳に蓄積されている記憶を呼び起こし、シャッフルし、新たに編成し直す契機となる性質をはらんでもいるのである。

旅か観光か？

……旅行を楽しんだあとは、旅先で得た出会いや発見、異文化体験・歴史体験、ほのかな恋心、ハプニングなど「ものがたり」を文章に起こし、その行動を一冊の中、記憶に留め置きたい……
ものがたり観光行動学会誌は、研究論文・研究ノートの他、「旅の記憶」をエッセイにしたため、社会に向けメッセージしたい。そう考え、旅の原稿を求めています。

紙面を
リニューアル
しました!



編集規程および執筆要領について 概要

ものがたり観光行動学会誌は、毎年7月末に原稿を締め切り、10月に1巻1号を発行する。本誌に論文等を掲載できる者は、編集委員会が特に依頼する場合を除き、共同執筆の場合を含め個人会員名で発表する者に限る。その主な内容を以下に示す。

原稿受付は
毎年7/1～7/31、
データ入稿に限る

掲載する内容

1. 大会関係論文（依頼）
2. 研究論文（投稿）
3. 研究ノート（投稿）
4. エッセイ（投稿）
5. 文献・図書（投稿）

査読の有無等

本学会編集委員会が別途定めた査読要領に基づき、掲載の可否を審査する。これらの詳細は、本学会ホームページ <http://narrative-tourism.org/> で公開する。なお、規程・要領は学会誌の改善目的のために軽微な修正が加えられる場合がある。この場合、毎年12月末迄に上記のホームページ上に修正箇所を明記して公開する。

ものがたり観光
行動学会誌
年1回発刊

旅の原稿を 求めています



- ・ 投稿は「学会員であること」のみが条件
- ・ 毎年7月末締め切り／投稿への詳細は本学会ホームページ参照
- ・ ただし!! 編集委員会によって「掲載可否」を決定!!
……すなわち少なからずハードルが存在する
- ・ このハードルを越えるのも旅の楽しみ

ものがたり観光行動学会誌

ものがたり観光 Narrative Tourism 第6号

発行日 2016年10月1日

発行／ものがたり観光行動学会

会長／白幡洋三郎

編集代表／ものがたり観光行動学会誌編集委員長 加藤晃規（関西学院大学名誉教授）

エディター／太田博一

クリエイティブデザイン／玉置伸

ものがたり観光行動学会

学会拠点事務所

〒541-0048 大阪市中央区瓦町1-2-10

☎06-6232-1613

✉info@monogatari-kanko.org

●学会誌のご注文、問い合わせは下記まで

デザイン・印刷／株式会社シンカ・コミュニケーションズ

〒586-0009 大阪府河内長野市木戸西町1-5-7

TEL 0721-52-5934 FAX 0721-53-3859

URL <http://www.cinca.jp> ✉anata@cinca.jp

ものがたり観光行動学会誌

2016年10月1日（毎年1回10月発行）第6号 発行人／白幡洋三郎 編集人／加藤晃規

学会拠点事務所 〒541-0048 大阪市中央区瓦町1-2-10 ☎06-6232-1613 ものがたり観光行動学会

定価 1,500円(会員定価 1,000円)税込